松江市文化財調査報告書　第87集

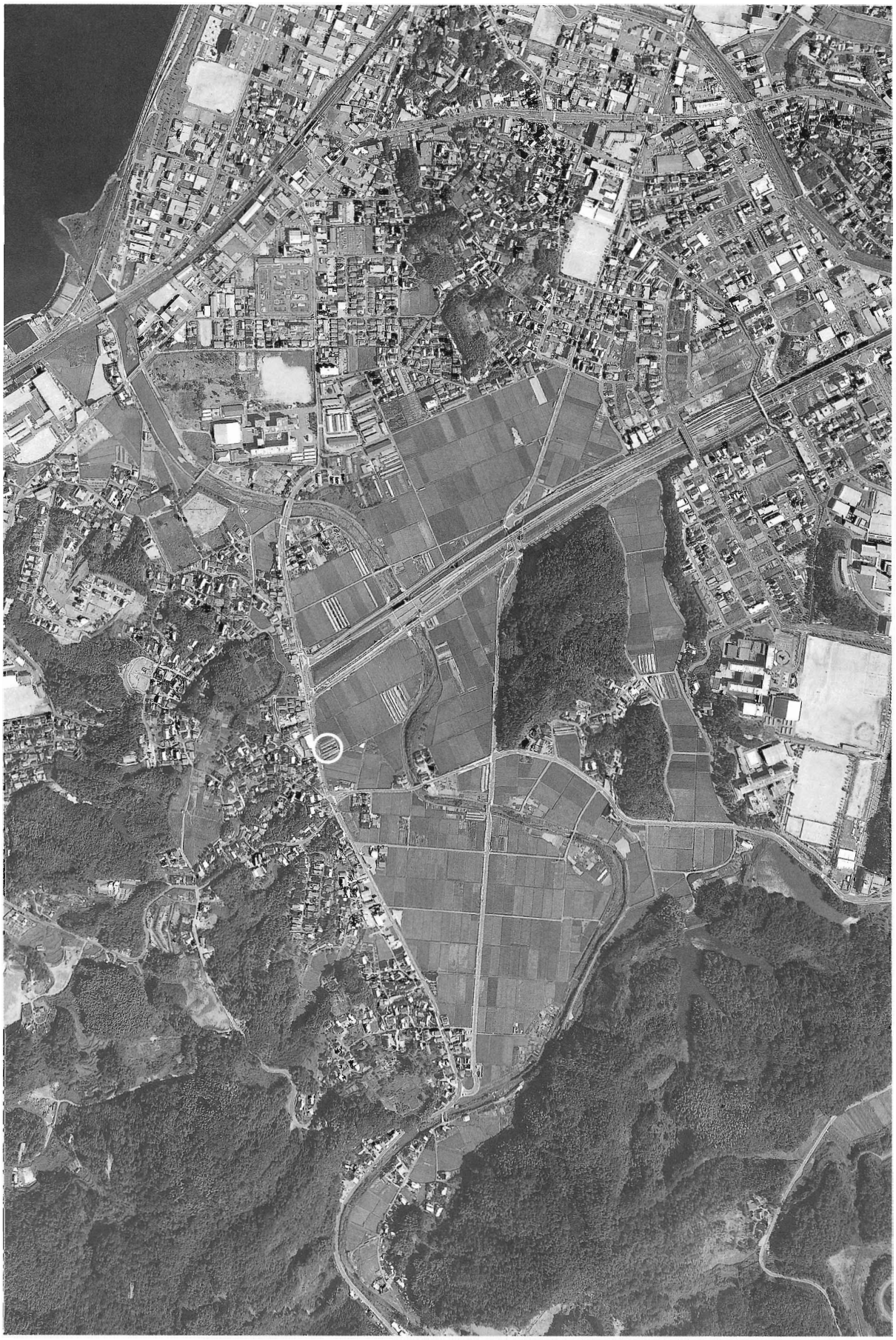
雲垣遺跡発掘調査報告書

2001年３月

松　江　市　教　育　委　員　会
財団法人松江市教育文化振興財団

図版 1

雲垣遺跡より田和山を望む



雲垣遺跡付近（上空より）

例　　言

1．本書は、平成12年度に実施した安達石油乃白給油所建設事業に伴う「雲垣（くもがき）遺跡」の発掘調査報告書である。

2．本発掘調査は、安達石油株式会社から松江市教育委員会が依頼を受け、財団法人松江市教育文化振興事業団が実施したものである。

3．発掘調査の組織は以下のとおりである

依　頼　者	安達石油株式会社	代表取締役　安達　喜吉
事業主体者	松江市教育委員会	
事　務　局	教　　育　　長	原　　敏（～９月）
		伊藤　忠志（10月～）
	文　化　財　室　長	岡崎雄二郎
	文化財係長(主幹)	吉岡　弘行
	文化財係(主任主事)	古藤　博昭
実　施　者	財団法人松江市教育文化振興事業団埋蔵文化財課	
	理　　事　　長	松浦　正敬
	専　務　理　事	米田　喜雄
	常　務　理　事	福井　勝美
	事　務　局　長	柳浦　孝行
調　査　者	調　査　係　長	瀬古　諒子
	調　査　補　助　員	廣濱　貴子

4．調査の実施にあたっては、次の方々の指導と協力を得た。記して感謝の意を表します。

池淵俊一（島根県教育庁文化財課文化財保護主事)、中村唯史（島根大学汽水域研究センター客員研究員)、丹羽野　裕（島根県埋蔵文化財調査センター)、株式会社豊洋工務店、目次悦雄、目次二郎

(敬称略、順不同)

5．発掘調査参加者は次の方々である。

安達和子、荒川幸枝、柿田敬志、兼折光夫、亀井美恵子、隅岡高吉、高橋歩実、時安順子、舟木武美、舟木頼、細田千代子、細田正義、細田ミヨノ

6．中村唯史氏には遺跡の立地と環境について玉稿をいただき、第２章に掲載した。

7．木製品の放射性炭素年代測定は株式会社地球科学研究所に委託した。

8．出土遺物は松江市教育委員会生涯学習課文化財室で保管している。

9．遺物の実測及び浄書は、廣濱、花田陽子、丹羽野、柿田、福田万里が行い、拓本は奥田美穂子、大森裕子、写真撮影は石川崇、廣濱が行った。また執筆・編集は瀬古と協議の上、廣濱が行なった。

本　文　目　次

第１章　調査に至る経緯 …… 1

第２章　位置と環境

１．雲垣遺跡の立地と環境 …… 2
２．歴史的環境 …… 5

第３章　調査の概要 …… 8

１．土層の堆積状況と遺物の出土状況 …… 12
２．出土遺物
１）土器 …… 18
２）木製品 …… 33
３）石製品 …… 41

第４章　自然科学分析

１．木製品の放射性炭素年代測定 …… 43

第５章　まとめ …… 48

挿　図　目　次

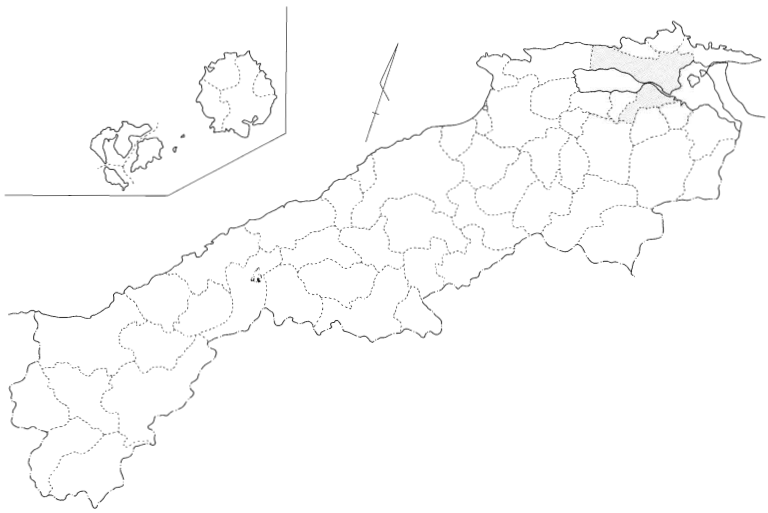
第１図　松江市位置図
第２図　雲垣遺跡位置図 …… 1
第３図　雲垣遺跡周辺の地質分布図 …… 3
第４図　宍道湖周辺の古地理図 …… 4
第５図　雲垣遺跡と周辺の遺跡 …… 6
第６図　雲垣遺跡調査区位置図 …… 8
第７図　雲垣遺跡調査成果図 …… 10
第８図　土層断面図（北壁、南壁） …… 13～14
第９図　遺物出土状況図 …… 16～17
第10図　弥生土器実測図（１） …… 21
第11図　弥生土器実測図（２） …… 22
第12図　弥生土器実測図（３） …… 23
第13図　弥生土器実測図（４） …… 24
第14図　弥生土器実測図（５） …… 28
第15図　弥生土器実測図（６） …… 30
第16図　弥生土器・須恵器他実測図 …… 32
第17図　木製品（木鏃）実測図 …… 33
第18図　枠付田下駄概念図 …… 34
第19図　木製品（田下駄）実測図 …… 35
第20図　木製品実測図 …… 36
第21図　木製品実測図 …… 37
第22図　石製品実測図 …… 42

表　目　次

表１　雲垣遺跡と周辺の遺跡一覧表 …… 7
表２　弥生土器観察表（壷） …… 27
表３　弥生土器観察表（甕） …… 29
表４　弥生土器観察表（高坏、底部） …… 31
表５　須恵器他観察表 …… 32
表６　木製品観察表 …… 40

図　版　目　次

図版１　雲垣遺跡より田和山を望む …… 巻頭
図版２　雲垣遺跡付近（上空より） …… 同
図版３　調査前遠景（北より） …… 3
　　調査前近景（西より）
図版４　調査後全景（西より） …… 11
　　調査後全景（東より）
図版５　北壁土層堆積状況 …… 15
　　南壁土層堆積状況
　　南壁西側土層堆積状況
図版６　遺物出土状況 …… 16
図版７　遺物出土状況 …… 17
図版８　弥生土器（壷） …… 25
図版９　弥生土器（壷） …… 26
図版10　弥生土器（甕） …… 29
図版11　弥生土器（高坏） …… 31
図版12　弥生土器（底部）、須恵器他 …… 32
図版13　木鏃 …… 33
図版14　田下駄 …… 38
図版15　木製品 …… 39
図版16　石製品 …… 41



第１図　松江市位置図

第１章　調査に至る経緯

平成12年度において、安達石油株式会社（事業者）は松江市乃白町地内で給油所建設用地の造成工事を計画した。

本開発予定地の周囲には欠田遺跡、門田遺跡、薬師前遺跡などの遺跡が存在していることから未発見の遺跡が存在する可能性が高く、事業者と松江市教育委員会で事前に協議した結果、工事着手前の試掘調査を実施して遺跡の有無を確認することとなった。

事業者より平成12年６月３日付で埋蔵文化財分布調査依頼書が提出されたことを受け、松江市教育委員会では平成12年７月10日に予定地内の試掘調査を実施した。

その結果、予定地南部に設定した試掘トレンチ１箇所で弥生土器片が集中して検出された。

遺物の確認された箇所については字名から「雲垣遺跡」と命名され工事着手前の本調査が必要となった。事業者と松江市教育委員会で協議した結果、平成12年度において本調査を実施することとなった。

平成12年８月30日付けで事業者より松江市教育委員会宛に発掘調査依頼書が提出され、平成12年９月１日付で本発掘調査に関する委託契約が締結された。

本発掘調査は、松江市教育委員会が財団法人松江市教育文化振興事業団に委託して平成12年９月より実施したものである。

（古藤博昭）

第２図　雲垣遺跡位置図

第２章　位置と環境

１．雲垣遺跡の立地と環境

地形・地質的立地

雲垣遺跡は松江市南西部を流れる忌部川下流に発達する小規模な沖積平野（仮称：乃木低地）にある。乃木低地は約１㎢で宍道湖に北面する。遺跡付近は緩やかな傾斜の沖積扇状地で、水田地帯となっている。遺跡の西側には丘陵が迫り、東側を忌部川が流れている。乃木低地に流れ出た忌部川は北東へ流れた後、独立丘陵（田和山）の手前で西へ大きく曲流して雲垣遺跡の方向へ向かい、遺跡の南東約100m で北へ曲流した後、約１㎞下流で宍道湖に流れ出ている。湖岸部における三角州性の平坦面の発達は貧弱で、湖岸まで延びる西側丘陵の先端から北東へ向かって緩やかな弧を描く湖岸線が約２㎞続く。現在は埋立によって湖岸線は直線的である。

乃木低地の周囲は低起状の丘陵地帯である。丘陵は中新統布志名層および更新統の段丘堆積層で構成されている。布志名層は軟質な泥岩が主体である。段丘堆積層は礫層が主体で砂層や泥層を伴う。段丘面は数段に区分でき、いずれの面も10～12万年前の大山松江軽石層（DMP）、三瓶木次軽石層（SK）に覆われている。

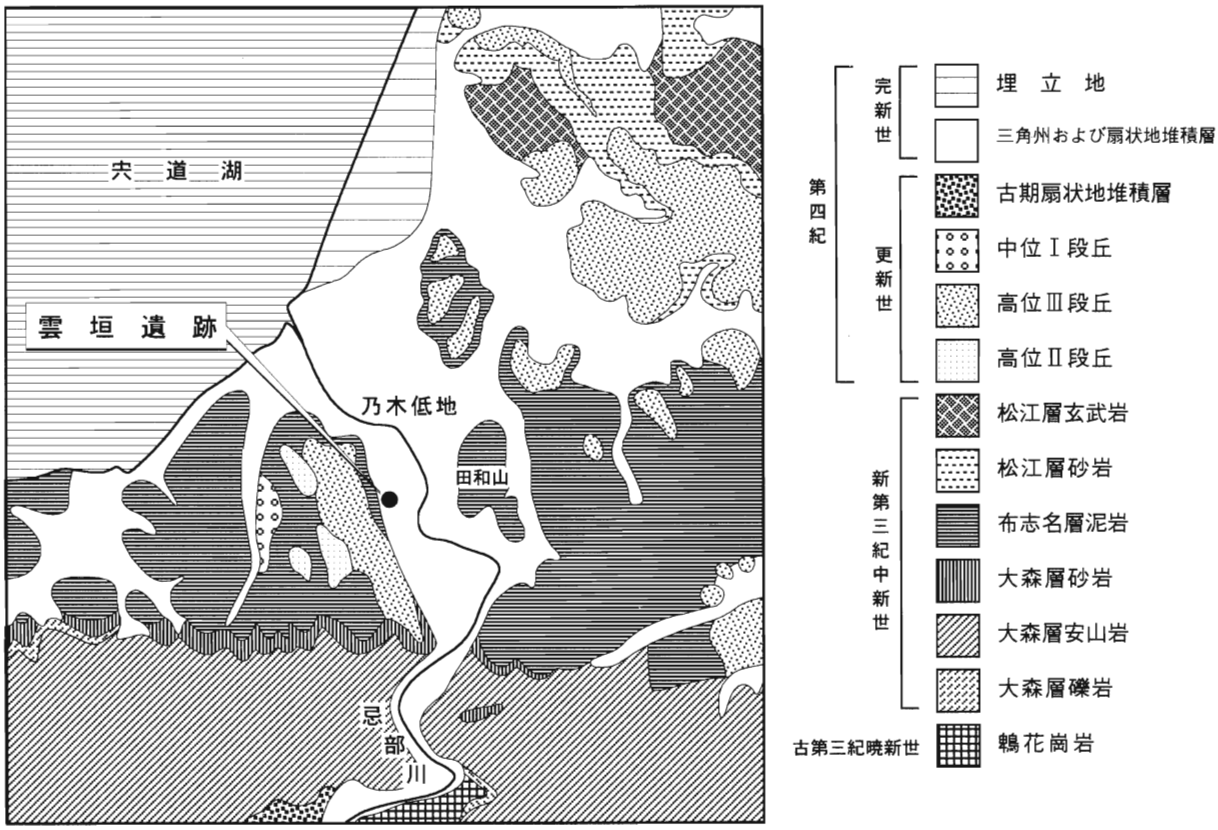
忌部川の中～上流には中新統大森層の安山岩や古第三系の花崗岩類が分布している。この地域の花崗岩類は中国山地の基盤を構成するものの一部で、白亜紀末から古第三紀に大規模に起こった酸性火成活動によって形成されたものである。

層序概説と堆積環境

雲垣遺跡はおもに泥質堆積物からなる自然堆積層中に遺物が含まれる遺跡で、住居址等の明瞭な遺構は確認されていない。最深部で約３ｍの深さまで掘削された調査トレンチにおいて、最下位には遺物を含まない灰白色粘土層が分布している。この粘土層は粘性が高く、均質でよく締まっている。風化の程度や地層の締まり具合から更新世の堆積層と推定でき、この遺跡における地山と判断された。

灰白色粘土層の上位に有機質に富んで暗灰～黒褐色を呈する泥質堆積層が重なり、弥生時代以降の遺物が含まれる。泥質堆積層の最下部では灰白色粘土層の上面を削り込んだ小河道が認められ、砂分に富むやや粗粒な堆積物が充填している。全体の傾向として、泥質堆積層の下部では堆積時の構造が残り、現地性のイネ科植物とみられる未分解の植物遺体（アシ？）がよく含まれているが、上方につれて堆積構造が不明瞭なかく乱層へと移行して近現代の耕作土となっている。

遺物を包含する泥質堆積層は、未分解の植物遺体を多く含むことや小河道を伴う特徴から湿地性堆積物と判断される。忌部川の河道に伴う粗粒な堆積物は認められないことから、弥生時代から近現代にいたるまで基本的には後背低地の湿地的環境にあったと考えられる。ただし、ある時期から水田として利用されるようになっており客土層も認められる。



第３図　雲垣遺跡周辺の地質分布図

湿地的な堆積環境が推定されることから、この地点に住居等があった可能性は低いが、土器が相当量出土していることからごく近くに人々が居住していたことが推定できる。泥質物を主体とする堆積層の層相からみて、土器は水流によって流れ込んだものではなく、人為的な移動（放棄？）によるものと判断される。したがって居住地がごく近い可能性が高い。遺跡の西側では数10m に丘陵が迫っているのでその裾部は居住地となりえたであろう。なお、木製品については泥質物とともに水で運搬され得るので、近くからもたらされたとは限らない。

周辺地域の古環境

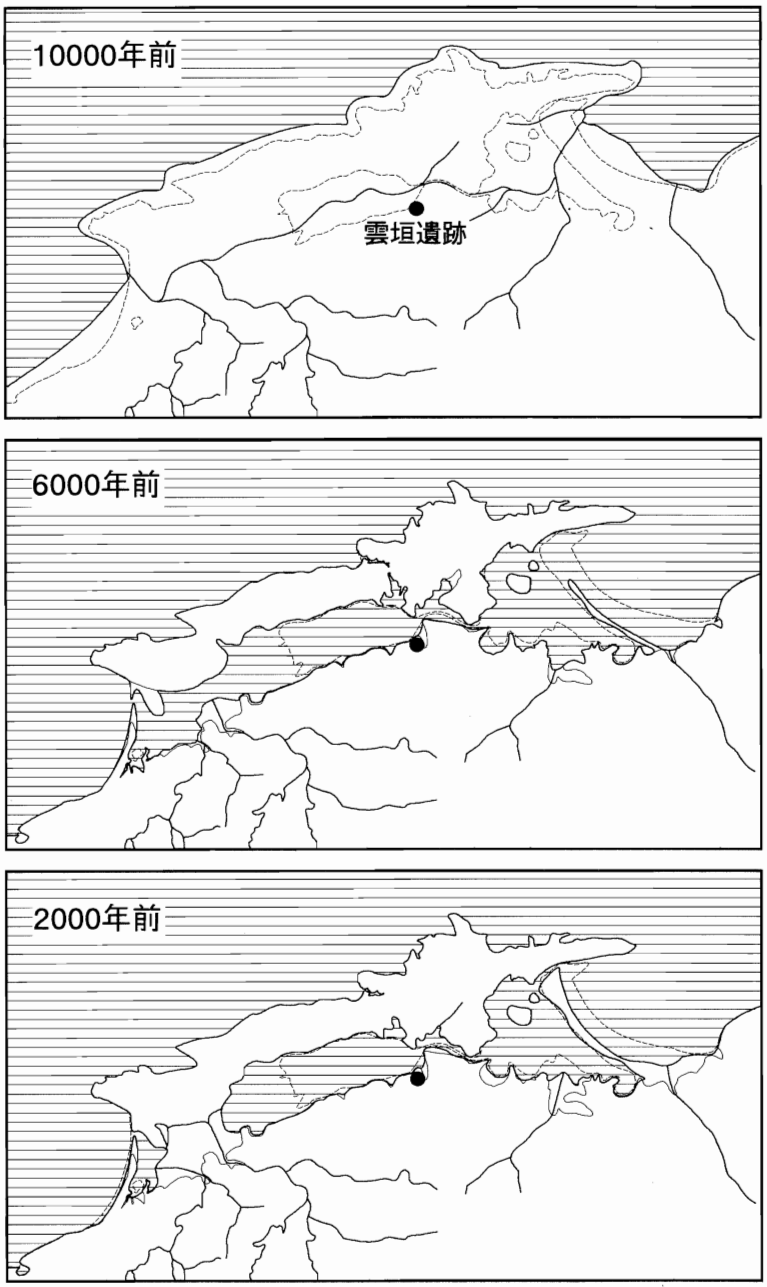
雲垣遺跡がある乃木低地は宍道湖に面している。宍道湖は縄文海進で形成された内湾が、斐伊川と神戸川の堆積作用によって外海から遮断されてできた潟湖である。このように、潟湖や沖積平野は過去数千年間に大きく環境が変化してきた場所である。

縄文海進は１万年前から５千年前頃にかけての急速な海面上昇に伴って生じたもので、最終氷期には谷だった宍道湖に海が入ってきたのは９千年前頃である。海進が最も進んだ６千年前頃には、大社湾から松江低地の奥まで続く細長い内湾が形成されていた。松江低地の北部にある西川津遺跡や島根大学構内遺跡では内湾に堆積した地層が確認されていて、漁具などの遺物も多数発見されている。

５千年前頃に海面の高さは現在より1.5m 程度高くなり、その後は小変動をしながら現在に至っている。海面の上昇が終わると、内湾に注ぐ河川の河口では堆積が進み沖積平野が拡大した。忌部川は

流域面積が小さく、また河口が宍道湖の中では最も波浪の影響を受けやすい東岸に面している（冬期に北西季節風が卓越するために宍道湖東岸には波浪の影響を受けやすい）。そのために乃木低地はあまり拡大していないが、斐伊川と神戸川の下流に発達する出雲平野は大きく拡大して島根半島が陸続きになり、宍道湖は大社湾から遮断された。

弥生時代は雲垣遺跡の中心的な時代で、また対岸の田和山遺跡の三重環壕が作られた時代である。この時の宍道湖は大社湾とのつながりはすでに絶たれて低塩分の潟湖になっていた。宍道湖から舟を使って海に出ようとする場合、乃木低地のすぐ北にある大橋川を通るのが唯一のルートだったことになる。雲垣遺跡では宍道湖との関わりを示すような遺物は発見されていないが、乃木低地の周辺で暮らした人々は宍道湖と様々な形で関わっていたのではないだろうか。（中村唯史）



第４図　宍道湖周辺の古地理図

2．歴史的環境

雲垣遺跡（1）は松江市乃白町字雲垣516－1、517－1、523－1に所在する。現状は水田と水田に盛り土したハウス用の畑地である。標高は東側水田で7.78m、西側8.61mを測る。

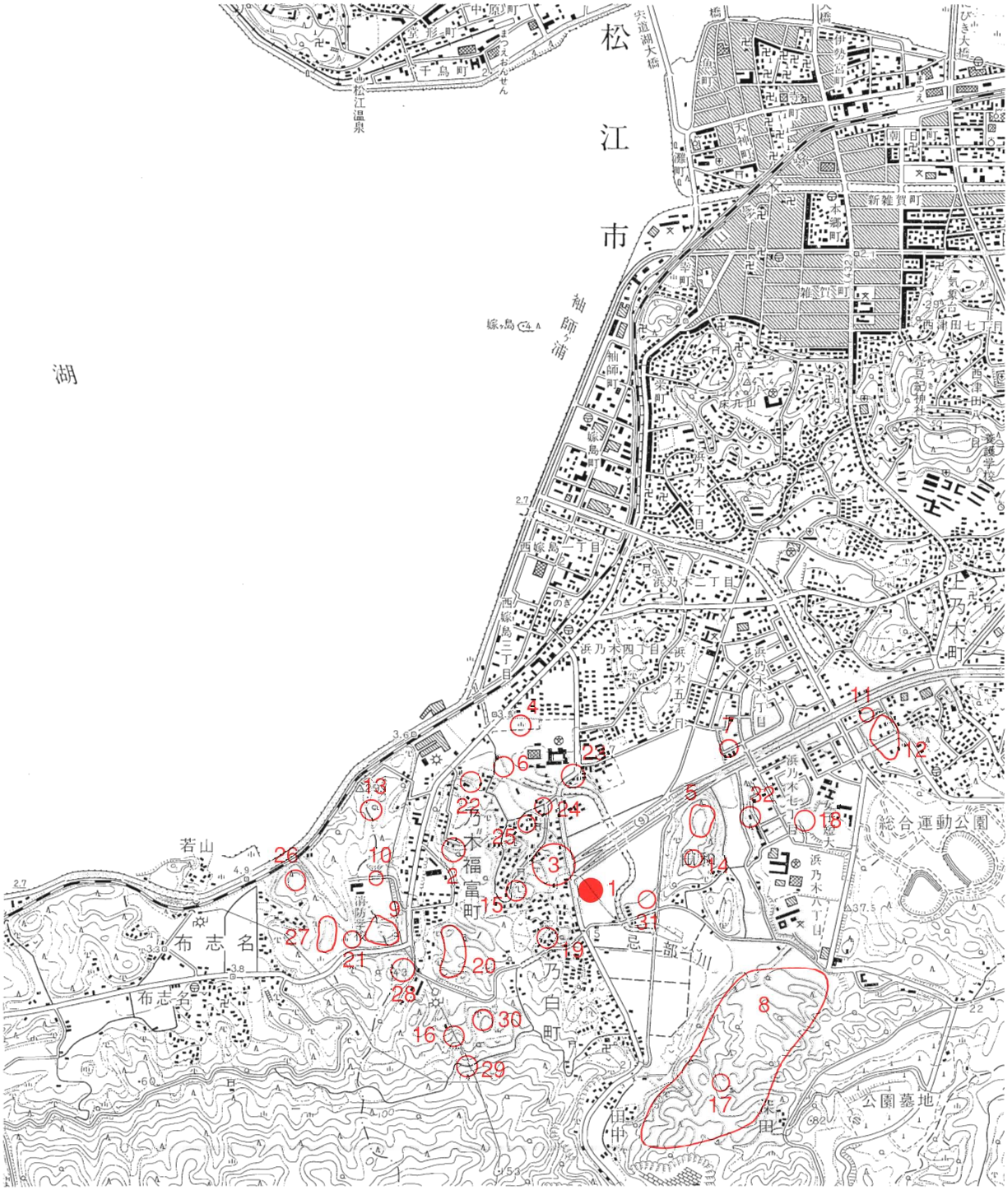
本遺跡周辺には多数の遺跡が存在する。

旧石器、縄文時代の遺物を出土した遺跡としては、廻田遺跡（2）、福富Ⅰ遺跡（3）があり、ナイフ形石器や尖頭器が出土している。福富Ⅰ遺跡では縄文時代の落とし穴状土壙が確認されているが、この時代の遺跡の数は少ない。

弥生時代の遺跡としては、欠田遺跡（4）、田和山遺跡（5）、福富Ⅰ遺跡（3）、門田遺跡（6）、友田遺跡（7）、袋尻A遺跡（8）などがある。欠田遺跡は前期から後期にわたる遺跡で大型蛤刃石斧、大型石包丁、石鏃、多量の土器片が出土している。最近発見された田和山遺跡は弥生時代前期末～中期の遺跡で、雲垣遺跡からは北東方向に位置している。小高い丘陵地に三重の環壕を廻らせ、その山頂部には物見櫓と思われる建物跡と総柱建物跡、柵跡が発見されている。環壕内からは磨製石剣、環状石斧、サヌカイトおよび黒曜石の多数の石鏃、壺、甕、高坏などの土器類、つぶて石が出土している。福富Ⅰ遺跡は雲垣遺跡の西側丘陵にあり、その1区からは弥生時代の土器、鍬、田下駄の一部が出土している。雲垣遺跡の遺物からみてもこの地域に水稲耕作があったことをうかがわせる。門田遺跡も最近調査された遺跡で、弥生時代中期～後期の溝状遺構、土器、石器、土玉などが出土している。友田遺跡は弥生時代中期～後期前半の遺跡で、墳丘墓6基、土壙墓26基、四隅突出墳丘墓1基が検出され、土壙墓の中からは、多数のサヌカイトおよび黒曜石の石鏃、管玉、勾玉が出土している。袋尻A遺跡は袋尻遺跡群の中のひとつで、雲垣遺跡と同じ弥生時代中期の高坏、甕などが出土している。

古墳時代の遺跡としては、袋尻遺跡群の4、7、8号墳（8）、大角山1号墳（9）、大角山遺跡(10)、乃木二子塚（11)、長砂古墳群（12)、二名留古墳群（13)、田和山1号墳（14）などがある。袋尻遺跡群の4、7、8号墳は最近発見された前期古墳である。4、8号墳からは合わせ口土器棺や鉄鏃が出土している。大角山1号墳は中期の前方後円墳で円筒埴輪の一部が見つかっている。大角山遺跡は古墳時代中期の遺跡で、竪穴式住居跡5棟で構成される集落跡である。竪穴式住居跡のうちには、碧玉製勾玉、管玉未製品、内磨砥石などを有し、玉生産を行っていたと考えられる。この遺跡の他にも乃白玉作跡（15）など花仙山周辺には多くの玉作工房跡が存在する。二名留古墳群は中期後葉～後期中葉にかけての3基からなる古墳群で、内部主体はいずれも箱式石棺である。田和山1号墳は後期の前方後円墳で、横穴式石室を持つ。乃木周辺での横穴式石室は少なく、多くは横穴墓で、松本横穴墓群（16)、菅沢谷横穴墓群（17)、袋尻横穴墓群（8)、奥山遺跡（18）などが知られている。

奈良時代以降の遺跡は、中世末～近世初頭の松本修法壇遺跡（19)、袋尻遺跡群の古墓群（8)、古代山陰道『正西道』推定ルートと思われる道路遺構が検出された、松本古墳群（20）や才の神遺跡(21）がある。



第５図　雲垣遺跡と周辺の遺跡

① 雲垣遺跡
② 廻田遺跡
③ 福富Ⅰ遺跡
④ 欠田遺跡
⑤ 田和山遺跡
⑥ 門田遺跡
⑦ 友田遺跡
⑧ 袋尻遺跡群
⑨ 大角山古墳群
⑩ 大角山遺跡
⑪ 乃木二子塚
⑫ 長砂古墳群
⑬ 二名留古墳群
⑭ 田和山１号墳
⑮ 乃白玉作遺跡
⑯ 松本横穴墓群
⑰ 菅沢谷横穴墓群
⑱ 奥山遺跡
⑲ 松本修法檀遺跡
⑳ 松本古墳群
㉑ 才の神遺跡
㉒ 神立遺跡
㉓ 福富Ⅱ遺跡
㉔ 蓮華垣遺跡
㉕ 屋形古墳群
㉖ 布志名大谷Ⅱ遺跡
㉗ 布志名大谷Ⅰ遺跡
㉘ すべりざこ古墳群
㉙ 岩屋口古墳群
㉚ 弥陀原横穴墓群
㉛ 薬師前遺跡
㉜ 後友田古墳

表１　雲垣遺跡と周辺の遺跡一覧表

番号	名　　称	所　在　地	種　別	概　　要
1	雲垣遺跡	松江市乃白町字雲垣	散布地	木鏃、田下駄、弥生土器
2	廻田遺跡	松江市乃木福富町	住居跡	竪穴式住居１棟、弥生土器、ナイフ形石器、スクレーパー
3	福富Ⅰ遺跡	同上	散布地	玉作工房跡、尖頭器
4	欠田遺跡	同上	散布地	石包丁、大型蛤刃石斧、弥生土器、土師器
5	田和山遺跡	松江市乃白町	環壕遺跡	三重環壕、掘立柱建物、柵、住居跡、弥生土器、磨製石剣、環状石斧、石鏃
6	門田遺跡	松江市乃木福富町	散布地	溝状遺構、弥生土器、分銅形土製品
7	友田遺跡	松江市浜乃木	墳墓	墳丘墓６基、土壙墓26基、四隅突出型墳丘墓１基、弥生土器、管玉、勾玉、石鏃
8	袋尻遺跡群	松江市平成町		古墳８基、横穴墓３穴、古墓、掘立柱建物、弥生土器、土師器、須恵器
9	大角山古墳群	松江市乃木福富町	古墳	前方後円墳１基、円墳６基、方墳
10	大角山遺跡	同上	集落跡	住居跡２棟、玉作工房跡３棟、玉未製品、土師器
11	乃木二子塚	松江市上乃木	古墳	前方後方墳、須恵器
12	長砂古墳群	同上	古墳	方墳18基、須恵器、鉄製品、玉類
13	二名留古墳群	松江市乃木福富町	古墳	方墳２基、円墳１基、箱式石棺、子持勾玉、臼玉
14	田和山１号墳	松江市乃白町	古墳	前方後円墳、横穴式石室、鉄製品、須恵器、ガラス小玉
15	乃白玉作遺跡	同上	玉作跡	砥石
16	松本横穴墓群	同上	横穴墓	横穴墓10穴
17	菅沢谷横穴墓群	松江市平成町	横穴墓	横穴墓12穴、須恵器、鉄製品
18	奥山遺跡	松江市浜乃木	横穴墓	横穴墓３穴、大刀、鉄釘
19	松本修法壇遺跡	松江市乃白町	修法壇跡	修法壇、五輪塔
20	松本古墳群	松江市乃木福富町		道路遺構、横穴墓、土壙
21	才の神遺跡	八束郡玉湯町布志名		石積基壇、古銭、溝状遺構
22	神立遺跡	松江市乃木福富町	散布地	弥生土器
23	福富Ⅱ遺跡	同上		石斧
24	蓮華垣遺跡	同上		石臼、叩き石
25	屋形古墳群	同上	古墳	３基、横穴式木室（１号墳）
26	布志名大谷Ⅱ遺跡	八束郡玉湯町布志名	古墳、窯跡	古墳４基、窯跡２基
27	布志名大谷Ⅰ遺跡	同上	古墳他	古墳４基、土壙８基
28	すべりざこ古墳群	松江市乃白町		礎石建物跡、土壙３基
29	岩屋口古墳	同上	古墳	横穴式石室
30	弥陀原横穴墓群	同上	横穴墓	横穴墓３穴、須恵器、土師器、石棺
31	薬師前遺跡	同上	散布地	弥生土器、土師器、須恵器
32	後友田古墳	松江市浜乃木	古墳	円墳１基、須恵器

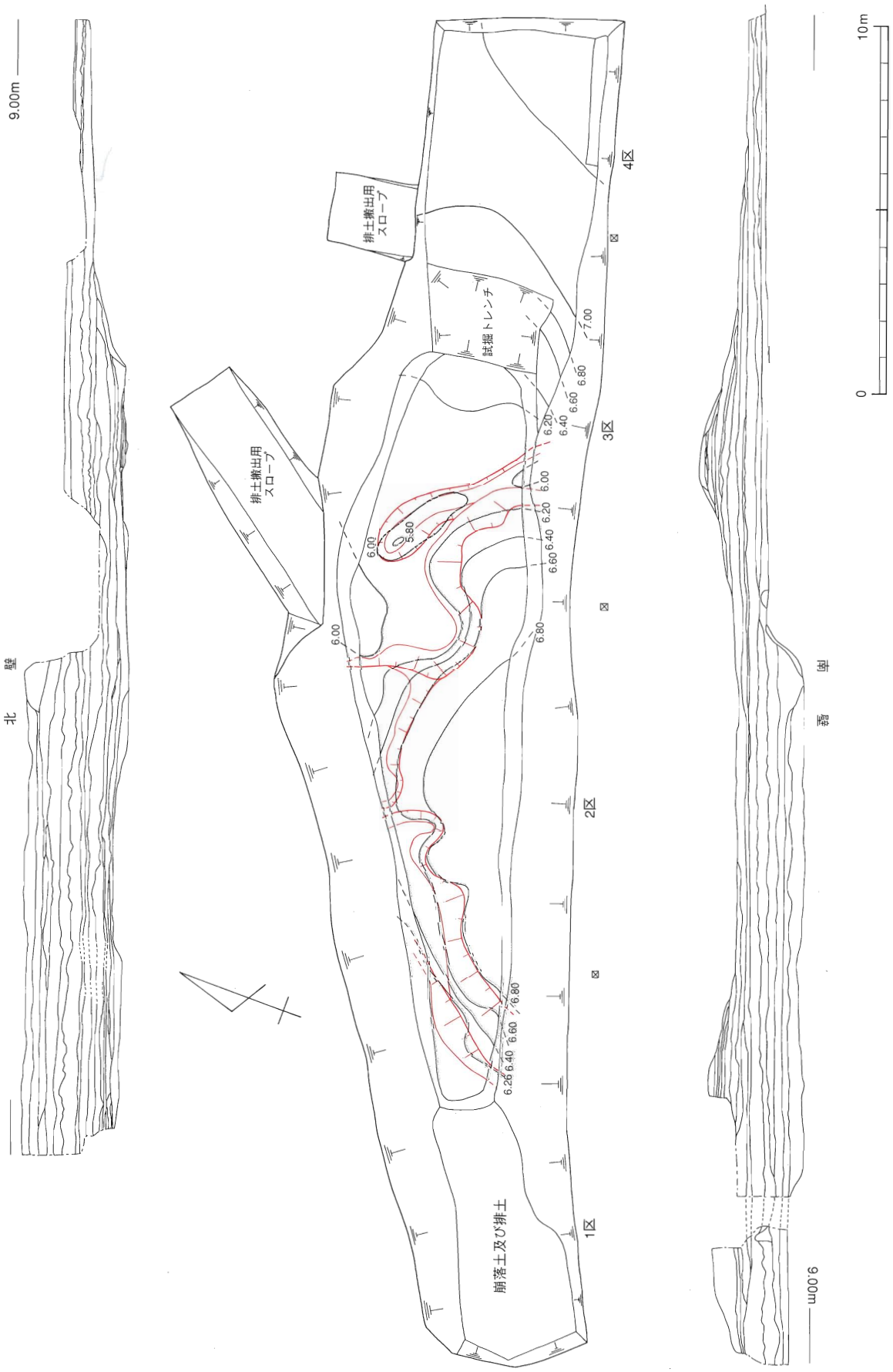
第３章　調査の概要

調査の結果、表土から地山までの間には30層におよぶ土層が堆積していたが、遺構はなかった。地山面には小規模な自然流路の跡が見られた。遺物は包含層中より弥生前期の甕、弥生中期の壷、甕、高坏等コンテナ１箱分、須恵器片、木鏃、田下駄、棒状木製品、板状木製品等の木器類多数、凹石他の石器類数点が出土した。

第６図　雲垣遺跡調査区位置図

調査前遠景（北より）

調査前近景（西より）



第７図　雲垣遺跡調査成果図

調査後全景（西より）

調査後全景（東より）

1．土層の堆積状況と遺物の出土状況

調査地に堆積した土層は第８図の通りである。表土から白色粘土層の地山面までの深さは0.5～2.5ｍを測る。東側の水田の東端から６～７ｍの間が最も浅くなっており、自然流路の見られる東側水田西端と西側の畑地の西端から５～６ｍの直下が最も深くなっている。その中間の地山は水の浸食が及ばず、削り残されて微高地状を呈し、調査区北側に向かって下がっていく。地山面の標高は5.8～7.2mである。

土層中に含まれる砂礫、有機質の遺体、出土遺物等から、30層の堆積土を上層、中層、下層に分けて記述する。

上層（第１層～第４層）

近現代（近世も含むかもしれない）の水田耕作土と床土層である。土器の細片が少量出土したが、時期の特定できるものはなかった。

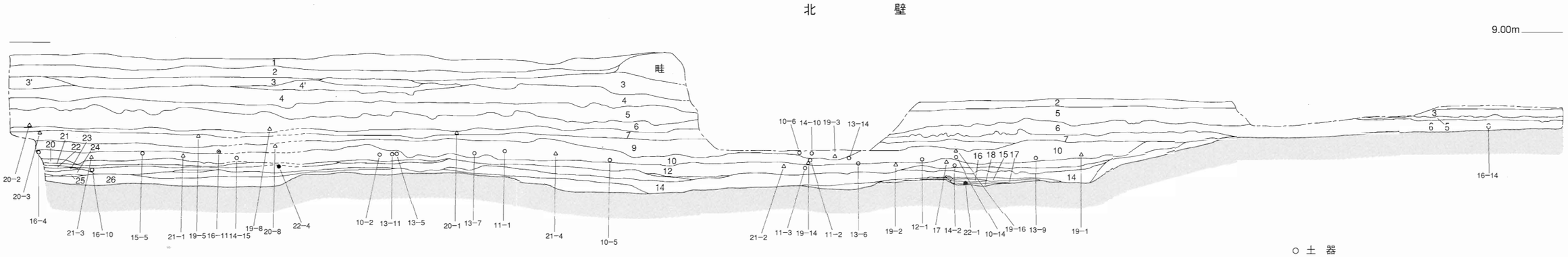
中層（第５層～第７層）

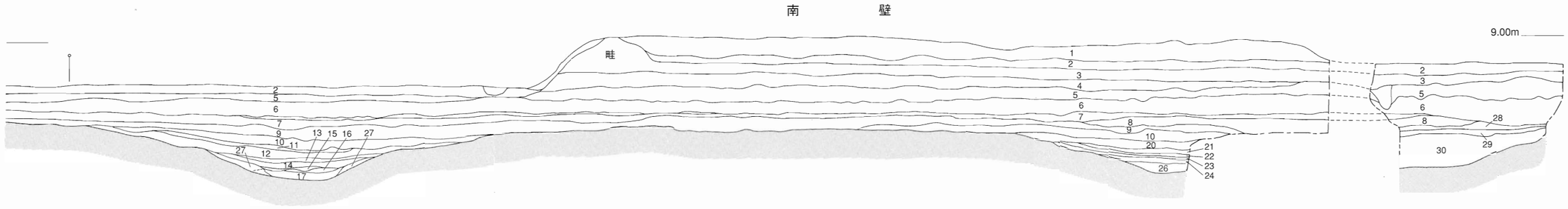
第５層は灰色～暗灰色粘質土、第６層は白～黄色の細かい粒子を含む淡褐灰色土で、どちらも凹凸が著しく、人の足や農具で撹乱されたものと思われる。第７層は布志名の岩盤に由来する砂岩～泥岩の小礫を多く含む褐灰色土層で人為的に客土されたものである。第６層と第７層の境は不明瞭な部分がある。これらのことからこの中層は水田であった可能性が非常に高いが、畦畔や水路などの水田に伴う遺構は残念ながら検出できなかった。遺物は古墳時代の須恵器の蓋坏小片、中世須恵器の壷胴部片、土師質土器の底部小片、弥生土器小片、代踏み用（田の土をならしたり、緑肥を踏みこんで土と混ぜならす）の枠付田下駄の横桟、板状木製品等が出土している。

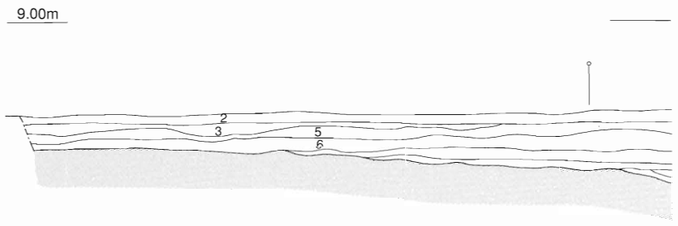
下層（第８層～第30層）

灰色を帯びた暗褐色～黒褐色系統の粘質土～砂質土が地山の地形に従って南側の微高地部分は薄く、北側へ行くほど厚く堆積している。いずれの層にも程度の差はあるものの、流木や低湿地の植物の茎や葉を多く含んでいることから、調査地一帯が沼のような湿地だったことがわかる。本遺跡の遺物の大半はこの湿地の堆積土から出土している。土器類は弥生前期の甕２点以外はすべて中期後半の壷、甕、高坏である。木製品は４孔式の稲刈り田下駄、木鏃、棒状のもの、板状のものなどが多量の流木と共に出土した。石器は凹石、石錘、砥石等がある。

なお流路状地形の堆積土の下部には、有機質を非常に多く含んだ層が常に水に浸された結果、茶褐色を呈する土層が見られ、最下部には淡褐色の砂層が堆積していた。茶褐色土層中の遺物は弥生土器小片数点、淡褐色砂層からは玉髄質のスクレーパー、黒曜石の小形石核が出土した。





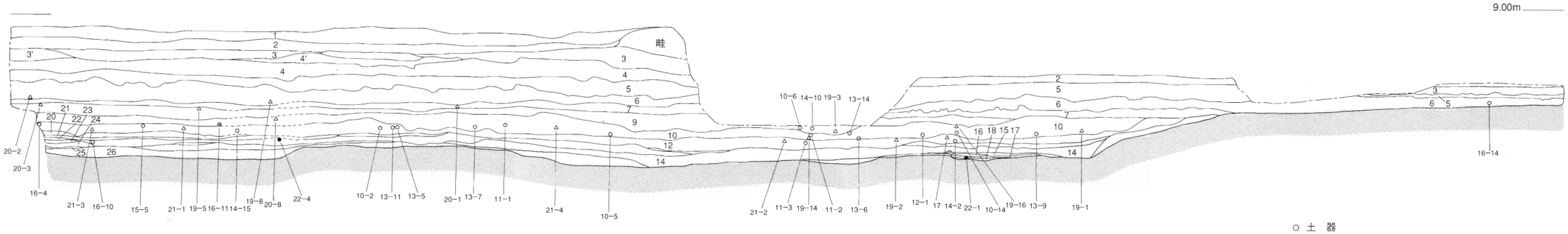


1 盛土
2 耕作土
3 灰青色砂質土　3' 3より淡色
4 灰色砂質土　4' 4より砂を多く含む
5 灰色～暗灰色粘質土
6 淡褐灰色土
7 褐灰色土
8 暗褐灰色砂質土
9 暗褐灰色土
10 黒褐色土
11 暗褐色粘質土
12 黒褐色砂質土（有機質多）
13 黒色土（有機質多）
14 茶褐色土（有機質多）
15 褐色砂層
16 暗褐色砂層
17 黒色砂層
18 淡褐色砂層
19 暗灰色砂質土（炭）
20 黒色粘質土
21 暗灰色粘質土　21' 21より粘質土
22 黒灰色土（有機質多、やや粘質）
23 黒灰色粘質土
24 暗灰褐色砂質土（有機質多）
25 褐灰色細砂
26 暗茶褐色土（有機質多）
27 灰褐色粘土
28 黒褐色粘質土
29 黒褐色土（細砂を含む）
30 黒灰色粘質土

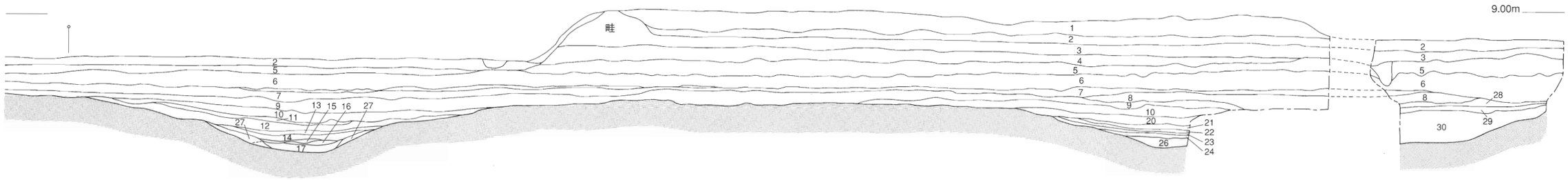
0　5m

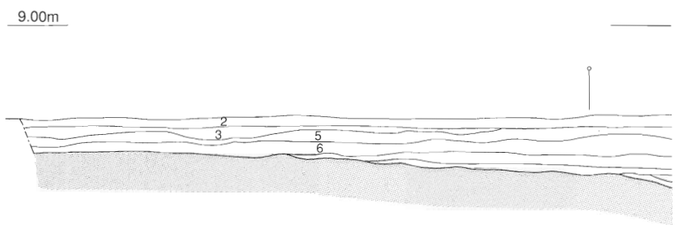
第８図　土層断面図（北壁、南壁）

北　　壁



南　　壁





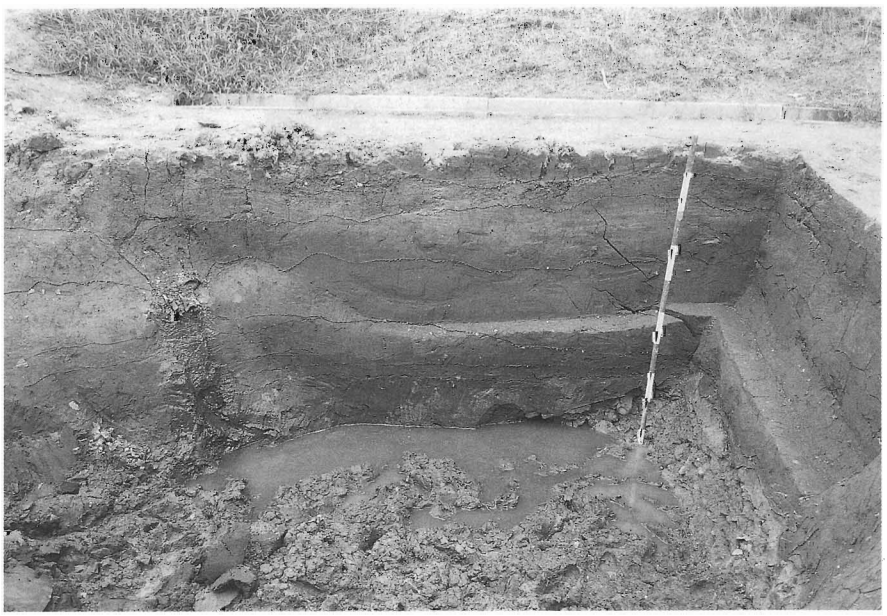
1 盛土
2 耕作土
3 灰青色砂質土　3' 3より淡色
4 灰色砂質土　4' 4より砂を多く含む
5 灰色～暗灰色粘質土
6 淡褐灰色土
7 褐灰色土
8 暗褐灰色砂質土
9 暗褐灰色土
10 黒褐色土
11 暗褐色粘質土
12 黒褐色砂質土（有機質多）
13 黒色土（有機質多）
14 茶褐色土（有機質多）
15 褐色砂層
16 暗褐色砂層
17 黒色砂層
18 淡褐色砂層
19 暗灰色砂質土（炭）
20 黒色粘質土
21 暗灰色粘質土　21' 21より粘質土
22 黒灰色土（有機質多、やや粘質）
23 黒灰色粘質土
24 暗灰褐色砂質土（有機質多）
25 褐灰色細砂
26 暗茶褐色土（有機質多）
27 灰褐色粘土
28 黒褐色粘質土
29 黒褐色土（細砂を含む）
30 黒灰色粘質土

0　　5m

第 8 図　土層断面図（北壁、南壁）

北壁土層堆積状況

南壁土層堆積状況



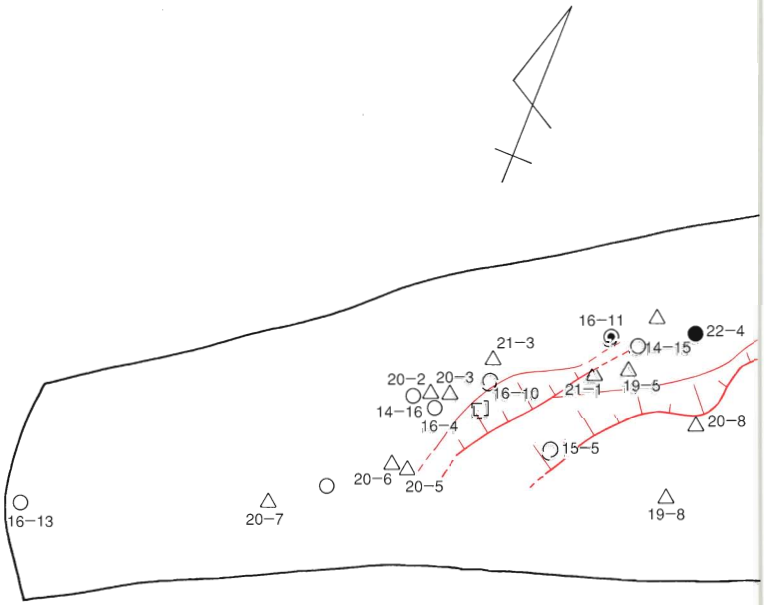
南壁西側土層堆積状況

図版 6

遺物出土状況

20-2

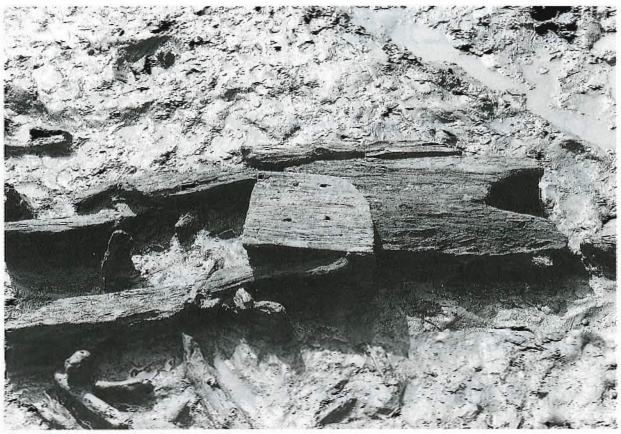
13-5



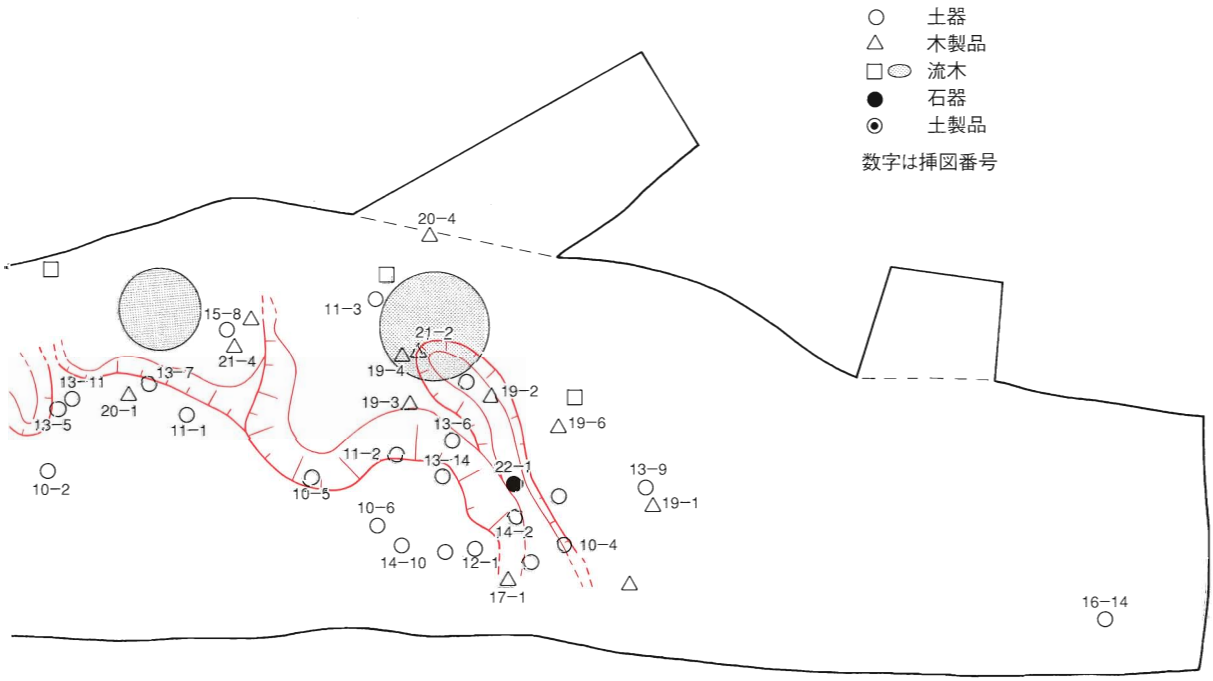
20-8

22-4

19-3



19-4



第９図　遺物出土状況図

12-1

19-1

2．出土遺物

（1）土器（第10図～16図）

弥生土器　壷　（第10図～第13図）

第10図、第11図は中期の広口壷で口縁が朝顔形に外反している。

10―1は口径25.2cmを測る。口縁端部が下方にやや拡張され、外面には3条の凹線を引いた後、刻み目を施し、その上に円形浮文を貼り付けている。調整は外面がナデとハケ、内面はナデである。10－2は口径30.0cmを測る。口縁が朝顔状に開き、口縁端部外面は内傾し3条の凹線を巡らしている。

10－3～6は口縁端部がやや肥厚し、口縁端部および口縁内面に多条の凹線が巡っている。器面調整は内面がハケ、外面がハケ、ナデである。口径は10－3が36.0cm、10－4が40.2cm、10－5が49.6cm、10－6が50.8cmを測る。

11－1は口径32.0cmを測る。口縁端部が上方に拡張され、外面には凹線を巡らしている。調整は内外面ナデとハケ調整を行っている。

11－2は口径34.0cm、口縁端部が上方に拡張し、内面に4条の凹線を施す。内面はナデ、ハケ目、外面はナデである。

11－3は口径34.0cm、残存高18.9cmである。口縁端部が上方に拡張され、凹線を巡らしている。器面調整は内面ハケとナデ、ハケ目の下には指頭圧痕がみられる。外面はハケ調整を行う。頸部には残存する部分に6条の凹線がみられる。

11－4、11－5は口縁部が上下に拡張した「くりあげ口縁」である。口径は11－4が42.4cm、11－5が42.8cmを測る。口縁端部、口縁内面に多条凹線を廻らせている。器面調整は外面がハケとナデ、内面がハケ調整を行っている。

12―1、12－2は壷の頸部である。12－1は頸部径推定19.0cmを測る。胴部と頸部の境は不明瞭で長胴系であると考えられる。外面はハケで器面調整を行い、凹線文、列点文、羽状文、櫛描直線文を描いている。内面もハケ調整を行い、部分的に指頭圧痕が残る。12－2は頸部の小片で、外面は凹線文、貝殻腹縁による（？）連続刺突文を施している。内面の調整は風化により不明である。

12－3、12－4は壷の口縁部の小片である。12－3は口縁端部に斜格子文が描かれている。12－4は口縁部内面、端部に櫛状工具による文様が施されている。

12－5は口径10.6cmを測る無頸壷である．口縁部がやや肥厚し、外面に4条の凹線文を巡らせる。器面調整は内外面共ハケとナデである。

13―1～14は壷の胴部の小片である。外面は器面調整をハケで行った後、凹線文、羽状文、櫛描直線文、列点文、刻み目、斜格子文などが描かれている　。13－7のようにその上に円形浮文や棒状浮文を付け加え、装飾豊かにしたものもみられる。内面の器面調整はハケによるものが多いが、ナデ調整のものもある。また指頭圧痕の残っている小片もある。胎土は2㎜以下の砂粒を含んでいる。

弥生土器　鉢（第12図－6）

12－６は直口口縁の鉢の口縁部と思われる。口縁端部は肥厚し、器面調整は風化により不明である。胎土は１㎜前後の砂粒を多く含んでいる。

弥生土器　甕（第14図）

１は口径19.0㎝、２は口径19.2㎝を測る。いずれも弥生前期のもので、口縁部は短く外反する。外面には指頭圧痕が見られ、ヘラミガキで調整されている。内面はハケとヘラミガキが施されている。胎土中に３㎜までの大粒砂粒を含む。

３は「く」の字状に屈曲する口縁部の小片である。器面調整は口縁部が内外面共ナデ、胴部が内外面ともハケである。

４、５、６は口縁端部が上方に拡張されている。口縁端部外面には多条の凹線が巡らされる調整は４、５がナデ、６が口縁部ナデ、胴部ハケ調整である。口径は４が13.8㎝、５が19.4㎝、６が19.5㎝を測る。

７は口径16.2㎝を測る。口縁端部がやや下に張り出している。口縁部外面には２条の凹線文の後、ヘラによる刻み目が施されている。頸部には指頭圧痕文帯を巡らせる。内面の調整はナデである。

８～15は口縁部が「く」の字状に屈曲し、端部が上下に拡張（７は除外）され、端部外面に２～４条の凹線文を巡らせている。８～10の頸部には指頭やヘラ状工具による圧痕文帯が見られる。器面調整は頸部から口縁にかけてナデ、胴部はハケである。10、12の胴部内面には指頭圧痕が残る。口径は13.0～20.6㎝を測る。

３～15の胎土には、２㎜以下の砂粒が含まれる。

弥生土器　高坏（第15図）

１～３は坏部である。口径は２が18.8㎝、３が18.6㎝を測る。口縁部が緩やかに内湾して外面に凹線文を巡らせる。２は凹線文の下部（屈曲部）に、風化してはっきりはわからないが、列点文が施されていたと思われる。器面調整は内外面共ハケとナデである。３の内面はハケの後ヘラミガキを行っている。

４は坏部～脚筒部の破片である。文様はなく、推定で全体の1/6程度残っている。器面調整は、内面は坏部がハケで、脚筒部がヘラケズリ、しぼり痕も見られる。外面は坏部がヘラミガキ、脚筒部から坏部にかけてはヘラケズリの後、ヘラミガキが行われていたと思われる。

５、６は脚筒部片である。５は外面に多条凹線文を、６は櫛描直線文を施す。器面調整は外面がハケとヘラミガキ、内面がヘラケズリでしぼり痕がみられる。

７～12は脚部片である。底径は9.6～15.0㎝を測る。７は脚部が緩やかに広がり、凹線文を施す。器面調整は外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリで、しぼり痕も見られる。８～12は脚端部が肥厚し、８以外は端面に凹線文を巡らせる。このうち12は凹線文の上に刻み目を施す。器面調整は外面がハケとヘラミガキ、内面がヘラケズリとナデである。

これらの高坏の胎土には２㎜以下の砂粒が含まれる。

弥生土器　底部（第16図－１～10）

１～10は弥生土器の底部である。底径は4.4～10.0cmを測る。１は台付鉢の底部で、6.6cmを測る。器面調整は内面ヘラケズリ、外面ナデである。２～９の器面調整は内面がハケ、ナデ、ヘラケズリ、外面はヘラミガキ、ナデを行っている。10は底部から胴部にかけての張りが大きく、調整は横方向のヘラミガキを行っている。底部にも一部ヘラミガキが残っている。

土製品（第16図－11）

11は4.8×4.6cm大、厚さ５㎜の土器片に直径７㎜の孔が貫通している。両面にハケ目が見られ弥生土器片を再利用し紡錘車として使ったものと思われる。

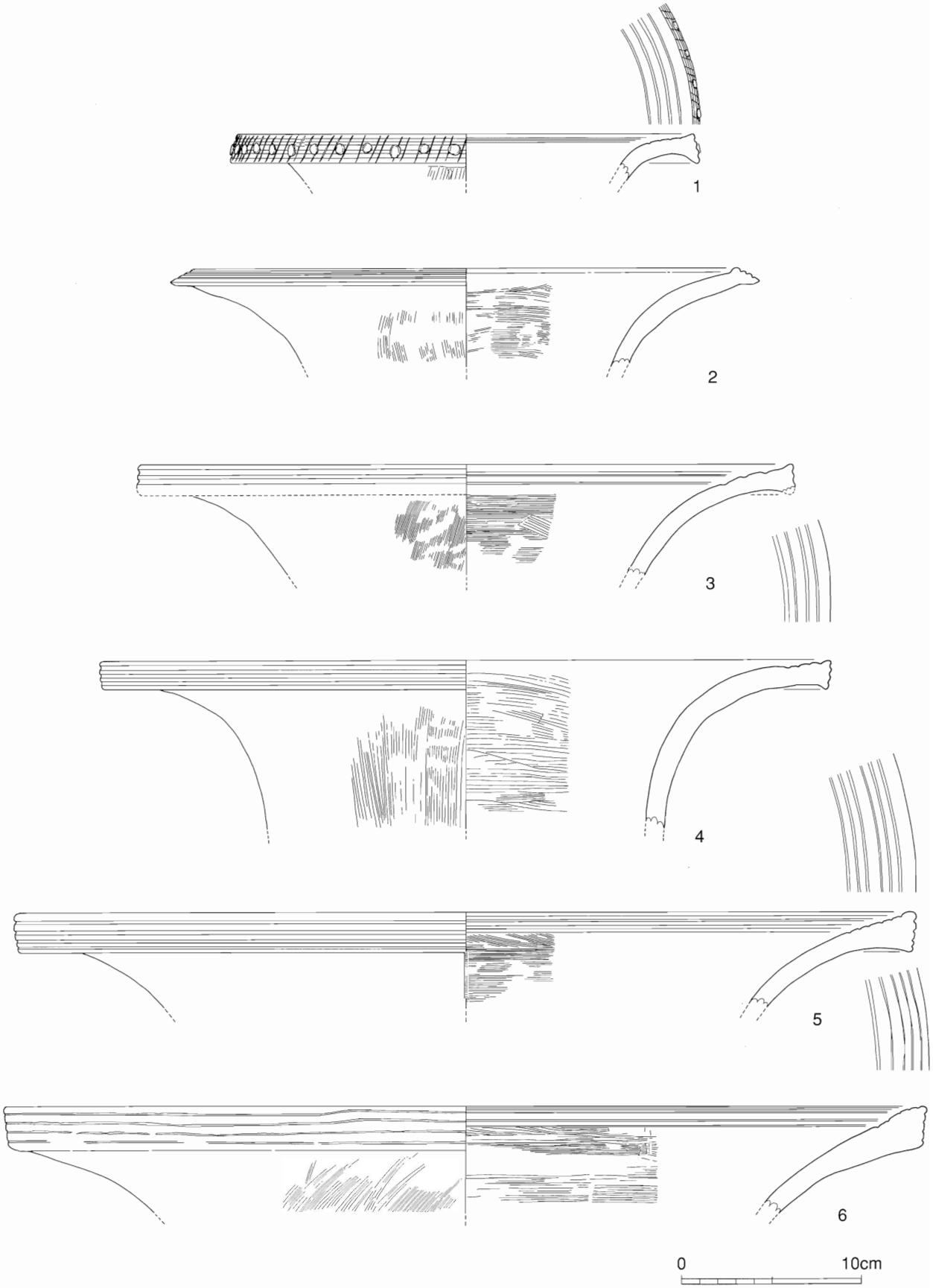
須恵器（第16図－12、13）

12は坏蓋の小片である。内外面共回転ナデが見られ、胎土中に１～２㎜大の砂粒を含む。古墳時代後期のものと思われる。

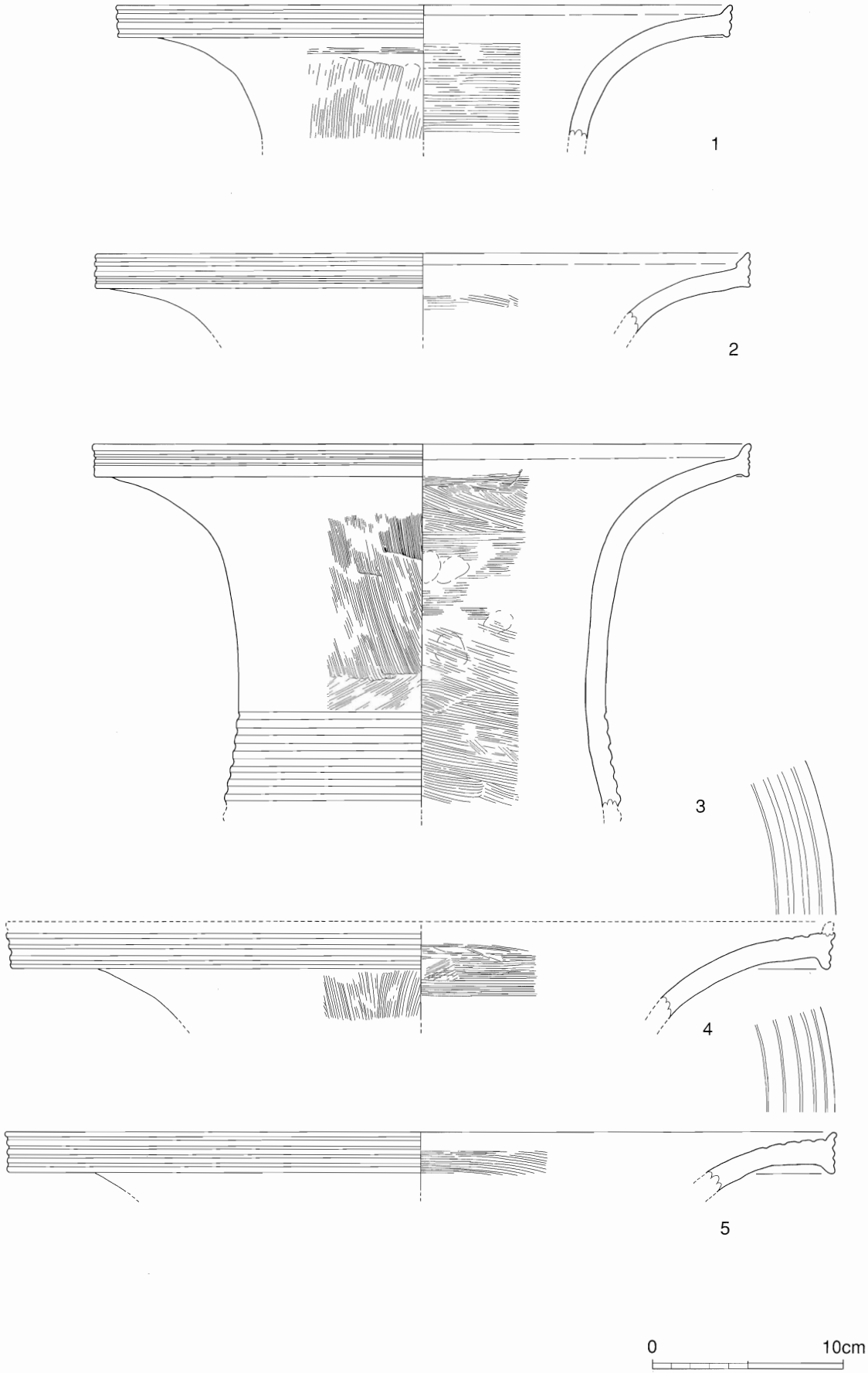
13は8.7×9.5cm大、厚み1.1cmの破片である。胎土は１～３㎜の砂粒を含み、内外面共回転ナデ調整を行っている。奈良・平安頃の壷の胴部片と考えられる。

土師質土器（第16図－14）

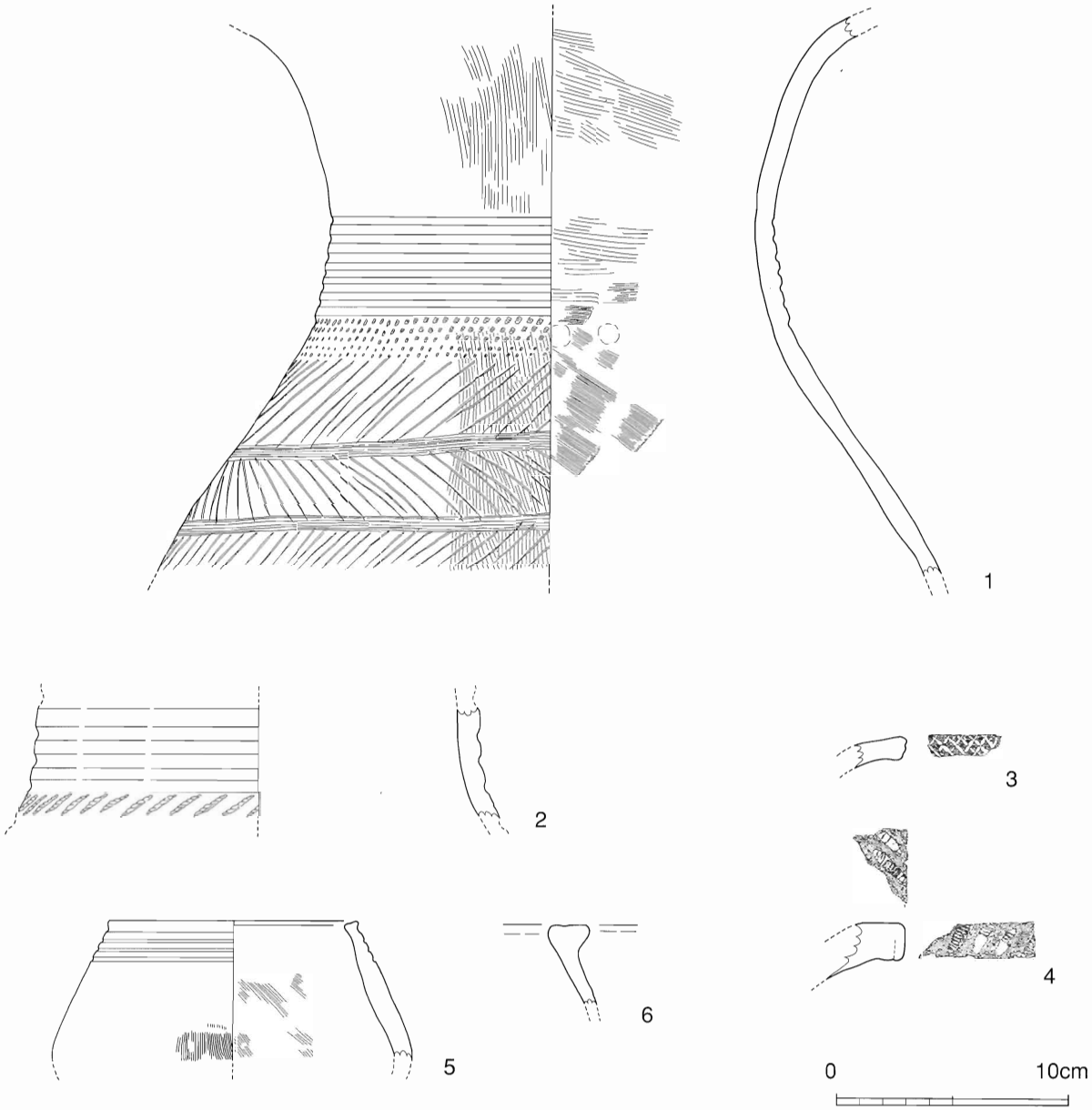
14は土師質土器の底部である。底径は推定4.4cmを測り、胎土は密である。糸きり痕がわずかに残る。



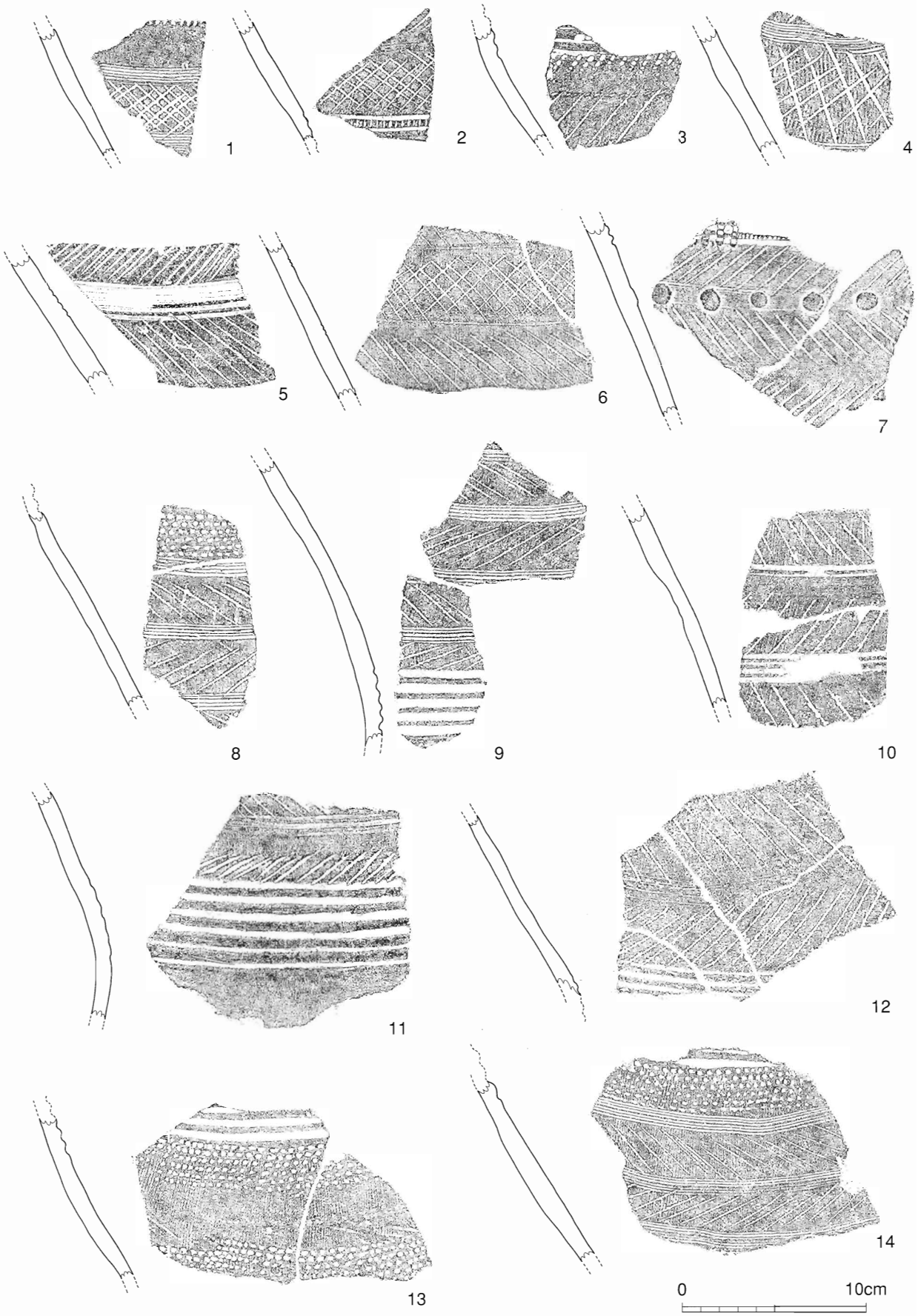
第10図　弥生土器実測図（1）



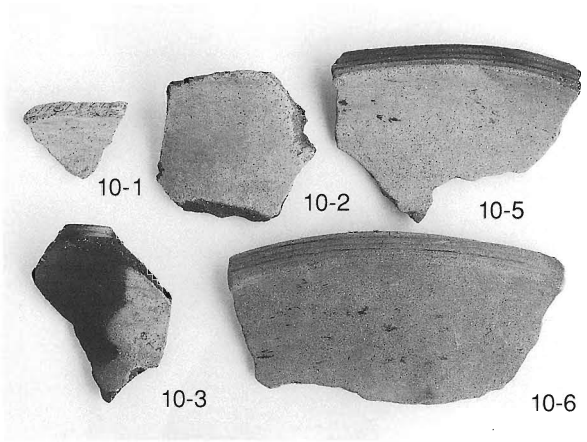
第11図　弥生土器実測図（２）

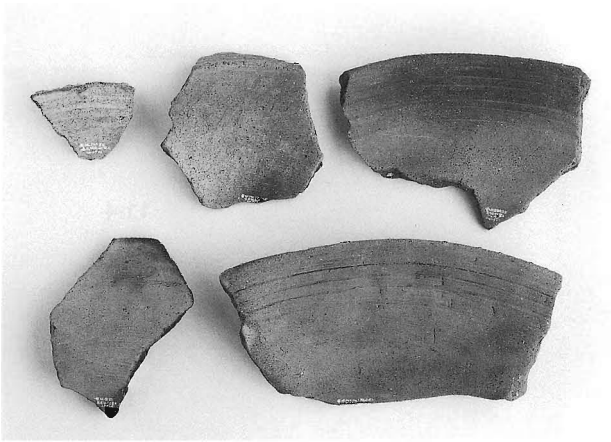


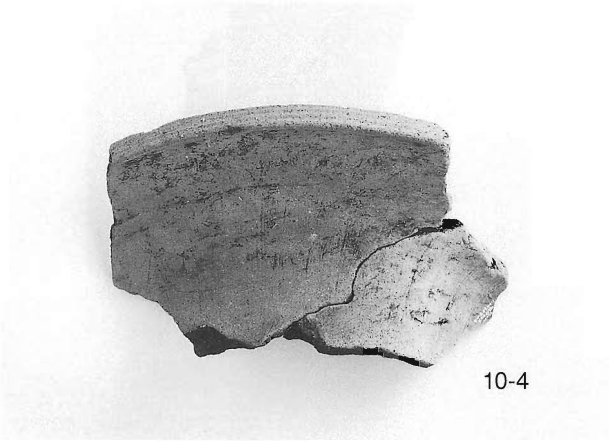
第12図　弥生土器実測図（３）

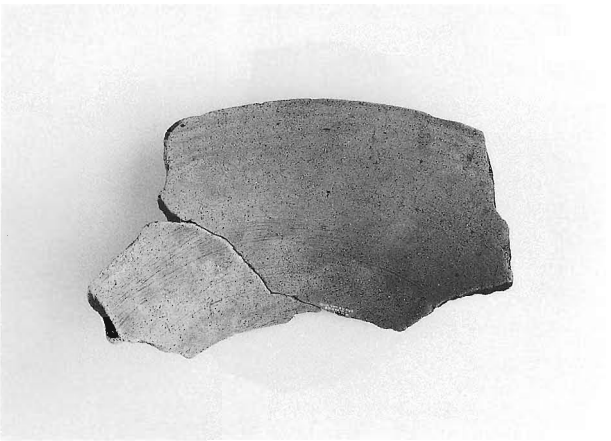


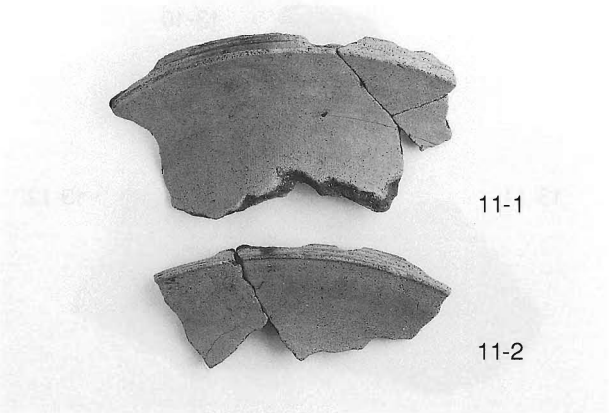
第13図　弥生土器実測図（４）

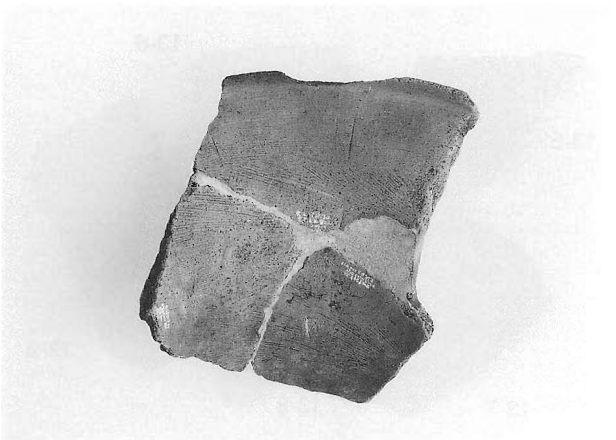




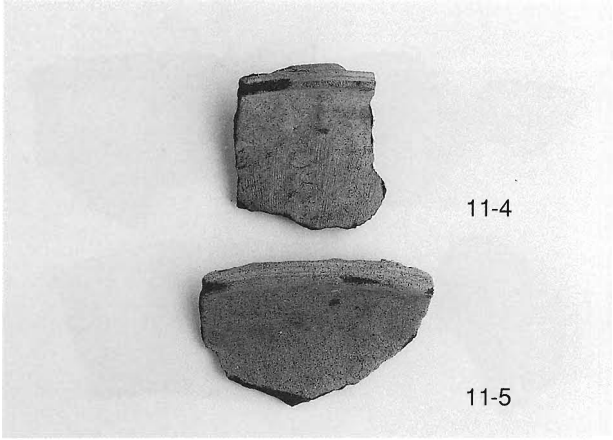


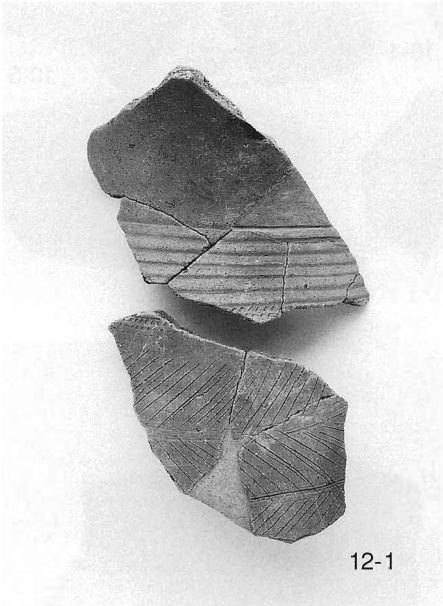


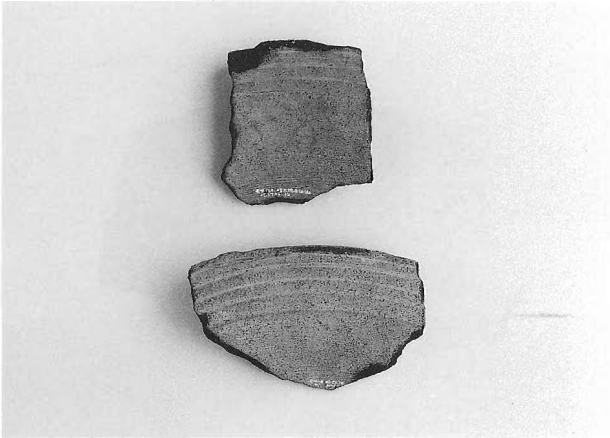


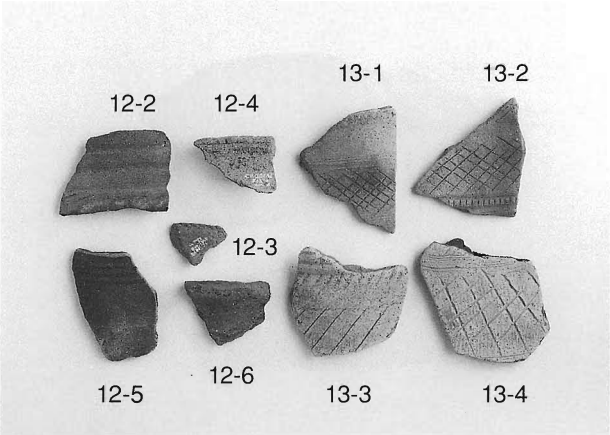


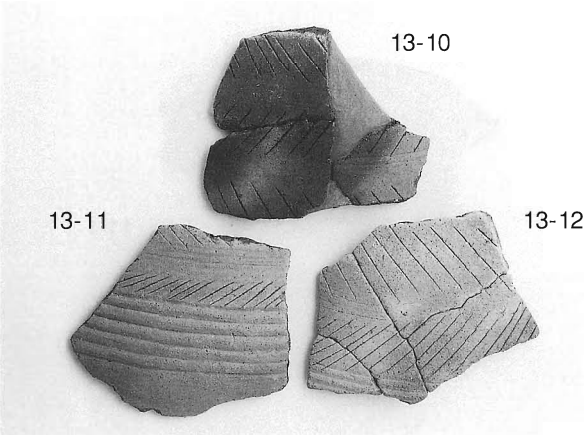
弥生土器（壷）

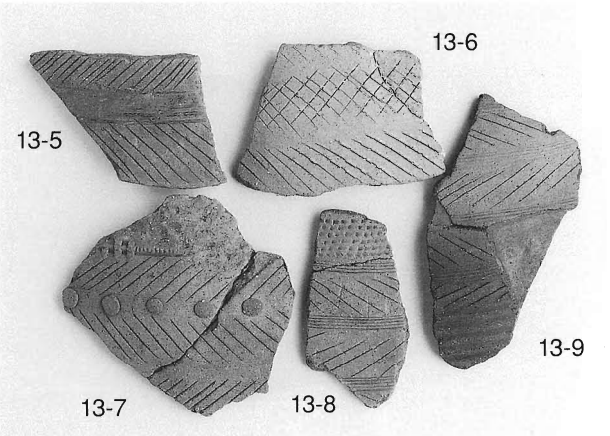

11-4
11-5

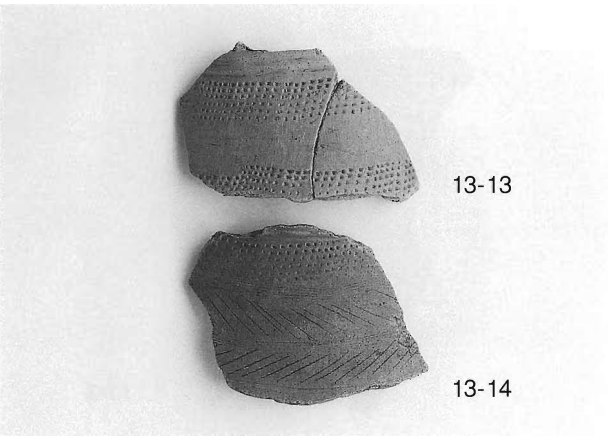

12-1




12-2
12-4
13-1
13-2
12-3
12-5
12-6
13-3
13-4


13-10
13-11
13-12

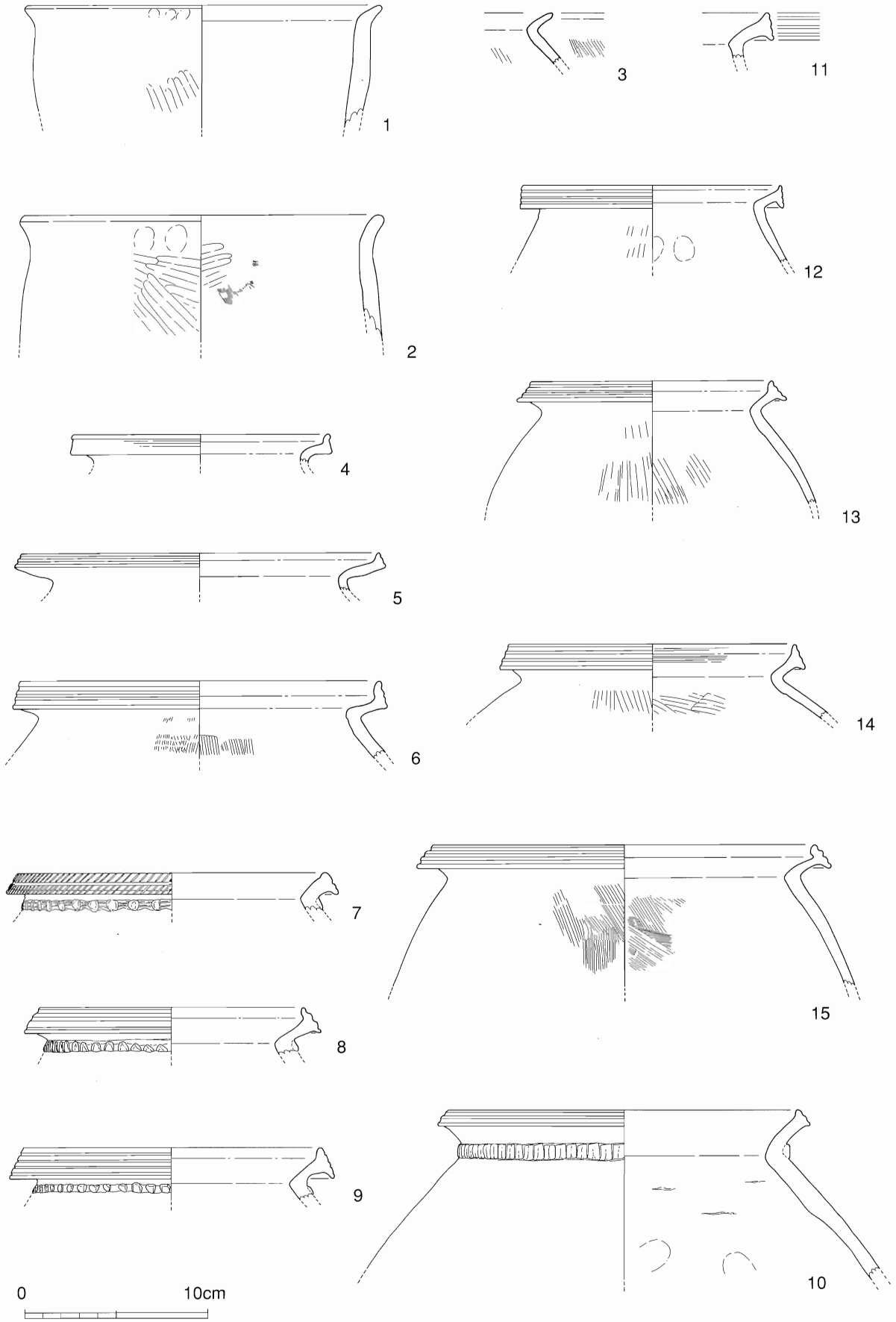

13-6
13-5
13-9
13-7
13-8


13-13
13-14

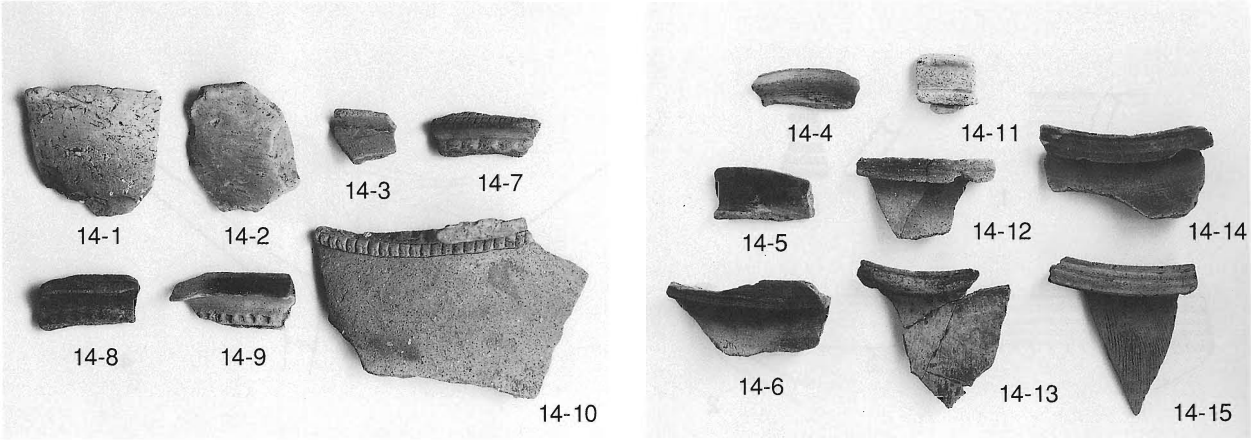
弥生土器（壷）

表２　弥生土器観察表（壷）

挿図番号	器　種	法量（cm）	形態・手法の特徴	胎　土	焼成	色　調	出土地点	備　考
10－１	広口壷	口径　25.2	口縁端部と内面に凹線文、刻み目、円形浮文、ハケ目	１㎜以下の砂粒を含む	良好	白茶色	３区９層	
2	広口壷	口径　30.0	口縁端部に凹線文、ナデ、ハケ目	１㎜以下の細粒を含む	良好	淡灰茶色	２区12層	
3	広口壷	口径　36.0	口縁内面と端部に凹線文、ハケ目、ナデ	２㎜以下の砂粒を含む	良好	灰白茶色	12層	外面に黒斑
4	広口壷	口径　40.2	口縁内面と端部に凹線文、ハケ目	１㎜以下の砂粒を含む	良好	淡褐色	３区10層	
5	広口壷	口径　49.6	口縁内面と端部に凹線文、ハケ目、ナデ	１㎜前後の砂粒を含む	良好	灰茶色	３区10層	
6	広口壷	口径　50.8	口縁内面と端部に凹線文、ハケ目	２㎜以下の砂粒を含む	良好	褐色	３区９層	
11－１	広口壷	口径　32.0	口縁端部に凹線文、ハケ目	１㎜以下の砂粒を含む	良好	褐色	２区10層	
2	広口壷	口径　34.0	口縁端部に凹線文、ハケ目	１㎜前後の砂粒を含む	良好	淡茶色	２区10層	
3	広口壷	口径　34.0	口縁端部と頸部に凹線文、ハケ目	１㎜前後の砂粒を含む	良好	灰茶色	３区12層	
4	広口壷	口径　42.4	口縁内面と端部に凹線文、ハケ目	１㎜前後の砂粒を含む	良好	灰色、断面は黒色	３区９層	
5	広口壷	口径　42.8	口縁内面と端部に凹線文、ハケ目	１㎜前後の砂粒多量	良好	淡褐色～淡灰褐色	試掘トレンチ	
12－１	壷頸部	頸部径19.0	頸部に凹線文、肩～胴部に列点文、羽状文、櫛描直線文、ハケ目	１㎜前後の砂粒を含む	良好	灰茶色	３区10層	
2	壷頸部		凹線文、連続刺突文	同上	良好	橙灰色	２区12層	
3	広口壷		口縁端部に斜格子文	１～３㎜の砂粒を含む	良好	淡灰橙色	１区黒灰色土	
4	広口壷		口縁内面と端部に連続刺突文	１㎜以下の砂粒を含む	良好	黄白灰色	３区12層	
5	無頸壷	口径　10.6	口縁部に４条の凹線文、内外面共ハケ目、ナデ	１㎜前後の砂粒を含む	良好	黒褐色～淡茶色		
6	鉢		口縁端部は肥厚、平坦面	同上	良好	灰茶色	２区10層	
13－１	壷胴部		斜格子文、櫛描直線文、刻み目、ハケ目	１㎜以下の砂粒を含む	良好	灰茶色	３区10層	
2	壷胴部		斜格子文、刻み目	同上	良好	灰茶色	３区12層	
3	壷胴部		ハケ目後列点文、羽状文、凹線文	２㎜までの砂粒多量	良好	灰白茶色	１区20層	
4	壷胴部		斜格子文、櫛描直線文	同上	良好	黄白～黒灰色	１区22層	
5	壷胴部		ハケ目後羽状文、凹線文	１㎜以下の長石、石英	良好	淡茶褐色	２区12層	
6	壷胴部		斜格子文、羽状文	同上	良好	淡茶褐色	２区10層	
7	壷胴部		凹線文、刻み目、羽状文、円形浮文、棒状浮文	５㎜以下の砂粒を含む	良好	淡褐色～黒褐色	２区10層	
8	壷胴部		ハケ目後列点文、羽状文、櫛描直線文	１㎜前後の砂粒を含む	良好	淡茶色	３区10層	
9	壷胴部		ハケ目後櫛描直線文、羽状文、凹線文	同上	良好	淡茶～灰茶色	３区10層	
10	壷胴部		櫛描直線文、羽状文	２㎜以下の砂粒を含む	良好	黒灰～灰茶色	３区12層	
11	壷胴部		凹線文、羽状文	１㎜前後の長石、石英	良好	淡灰褐～淡茶褐色	２区12層	
12	壷胴部		羽状文、凹線文	２㎜以下の砂粒を含む	良好	灰白茶色	３区10層	
13	壷胴部		ハケ目後列点文、凹線文	１㎜前後の砂粒を含む	良好	灰黄茶色	３区12層	
14	壷胴部		凹線文、列点文、羽状文、櫛描直線文	同上	良好	灰黒茶色	３区10層	



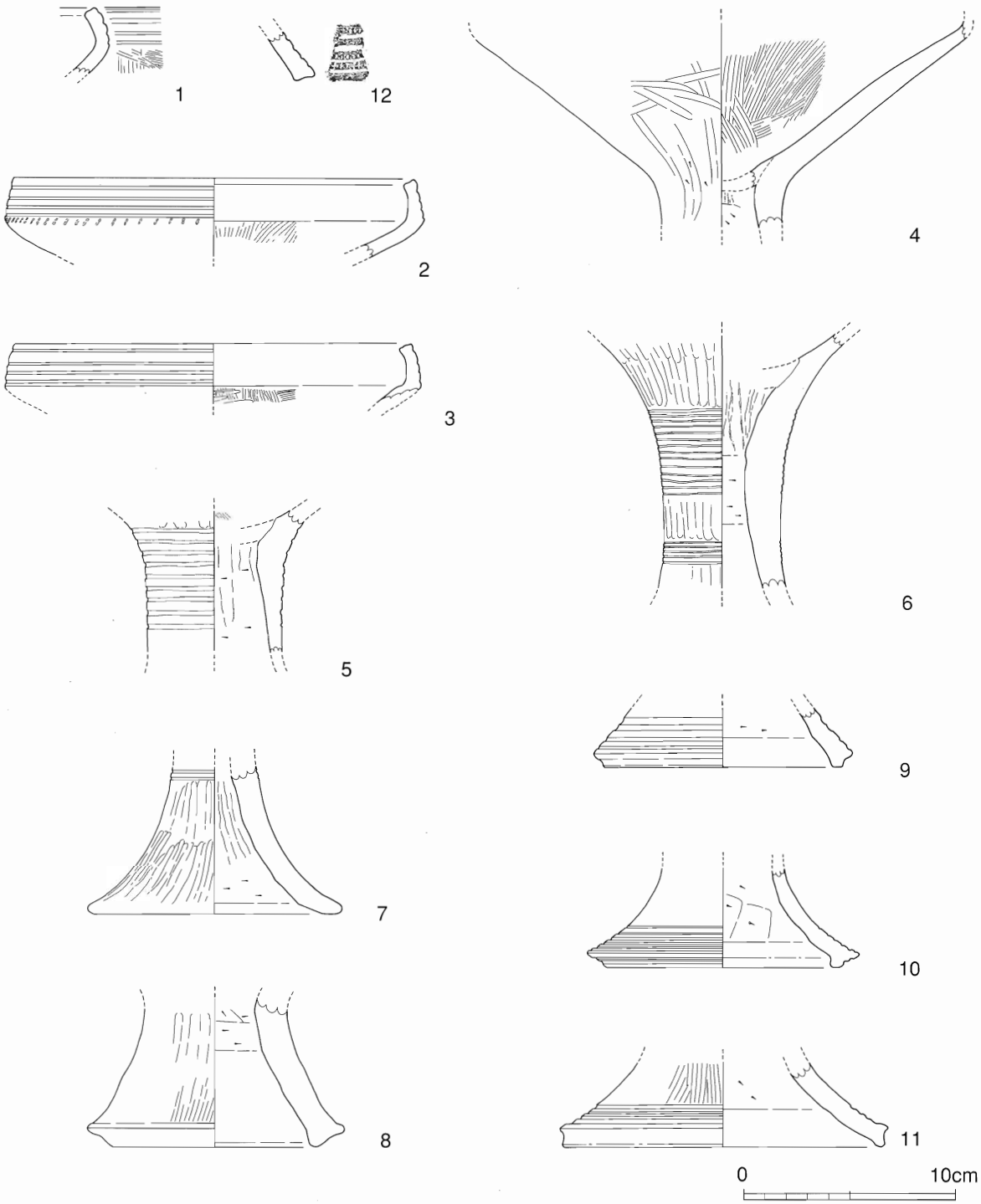
第14図　弥生土器実測図（５）



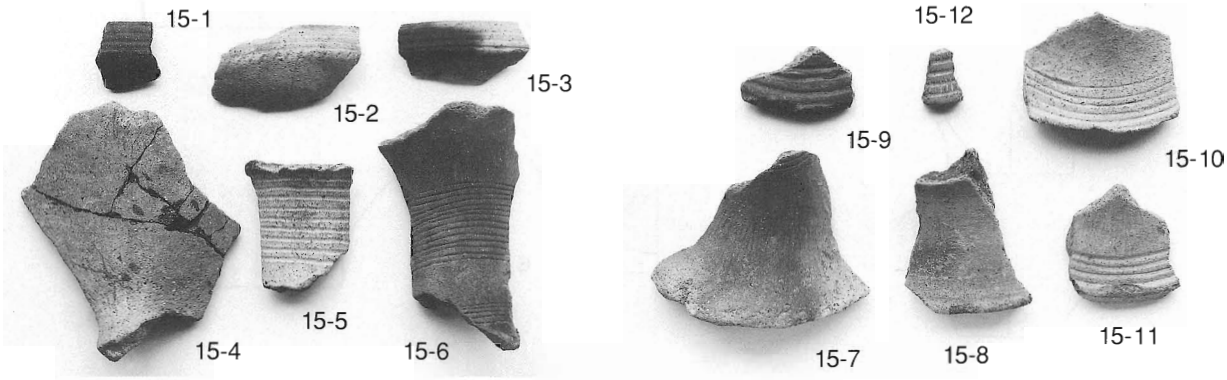
弥生土器（甕）

表３　弥生土器観察表（甕）

挿図番号	器　種	法量（cm）	形態・手法の特徴	胎　土	焼成	色　調	出土地点	備　考
14－1	甕口縁	口径　19.0	口縁部は短く外反、外面ヘラミガキ、指頭圧痕	３㎜大の砂粒を含む	良好	淡褐色～淡灰褐色	12層	外面に黒斑あり
2	甕口縁	口径　19.2	口縁部はゆるく外反、胴部はやや張り出す、ヘラミガキ	１～３㎜大の砂粒を含む	良好	淡褐灰色	３区12層	
3	甕口縁		「く」の字状に屈曲する口縁部の小片、ハケ目	細砂を含む	良好	白茶色	１区23層	
4	甕口縁	口径　13.8	口縁端部は上方にやや拡張し、外面に凹線文痕跡	１㎜以下の砂粒を含む	良好	灰茶色	３区９層	
5	甕口縁	口径　19.4	口縁端部は内傾し、上方に拡張、外面に凹線文	１㎜前後の砂粒を含む	良好	灰茶色	３区10層	スス付着
6	甕口縁	口径　19.5	口縁端部はやや内傾、上方に拡張し、外面に３条の凹線文、内外面ハケ目	１㎜前後の砂粒を含む	良好	灰白茶色	１区12層	
7	甕口縁	口径　16.2	口縁端部に凹線文と刻み目、頸部に指頭圧痕文帯	１㎜前後の砂粒を含む	良好	淡茶褐色	３区10層	
8	甕口縁	口径　14.0	口縁端部に３条の凹線文、頸部に指頭圧痕文帯	１㎜前後の長石、石英	良好	暗茶褐色		
9	甕口縁	口径　15.6	口縁端部に４条の凹線文、頸部に指頭圧痕文帯	１㎜以下の砂粒を含む	良好	淡灰褐色		
10	甕口縁	口径　18.6	口縁端部に２条の凹線文、頸部に指頭圧痕文帯	２㎜以下の砂粒を含む	良好	淡茶褐色	３区９層	
11	甕口縁		口縁端部に３条の凹線文	１㎜以下の細粒多量	良好	淡灰褐～灰橙茶色	３区９層	
12	甕口縁	口径　14.0	口縁端部に３条の凹線文、ハケ目、指頭圧痕	細粒を含む	良好	灰白茶色	試掘トレンチ	黒斑あり
13	甕口縁	口径　13.0	口縁端部に３条の凹線文、内外面ハケ目	１㎜以下の砂粒を含む	良好	淡白茶色		外面スス付着
14	甕口縁	口径　15.5	口縁端部に３条の凹線	細粒を含む	良好	淡灰茶色	２区10層	
15	甕口縁	口径　20.6	口縁端部に３条の凹線文、内外面ハケ目	１㎜以下の細粒を含む	良好	淡褐色	２区12層	一部スス付着



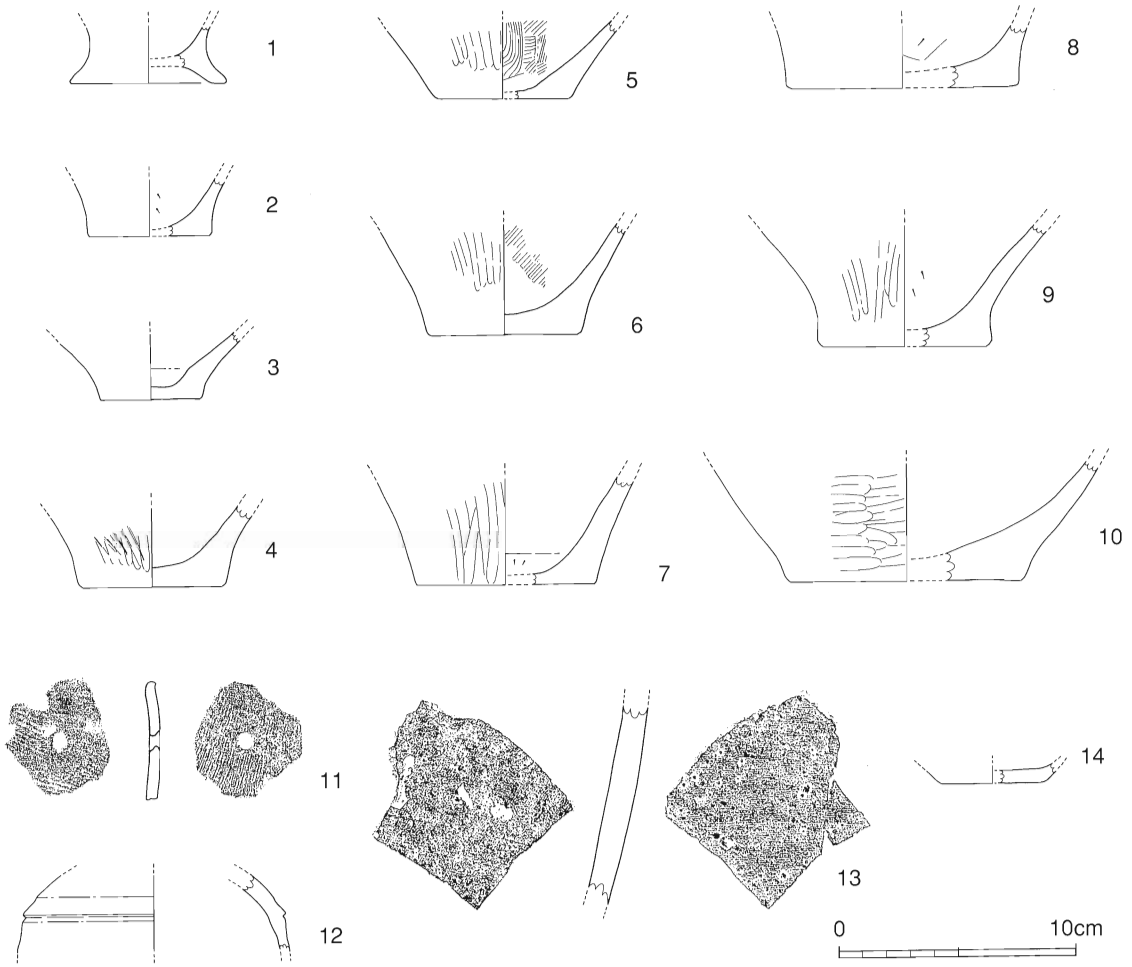
第15図　弥生土器実測図（６）



弥生土器（高坏）

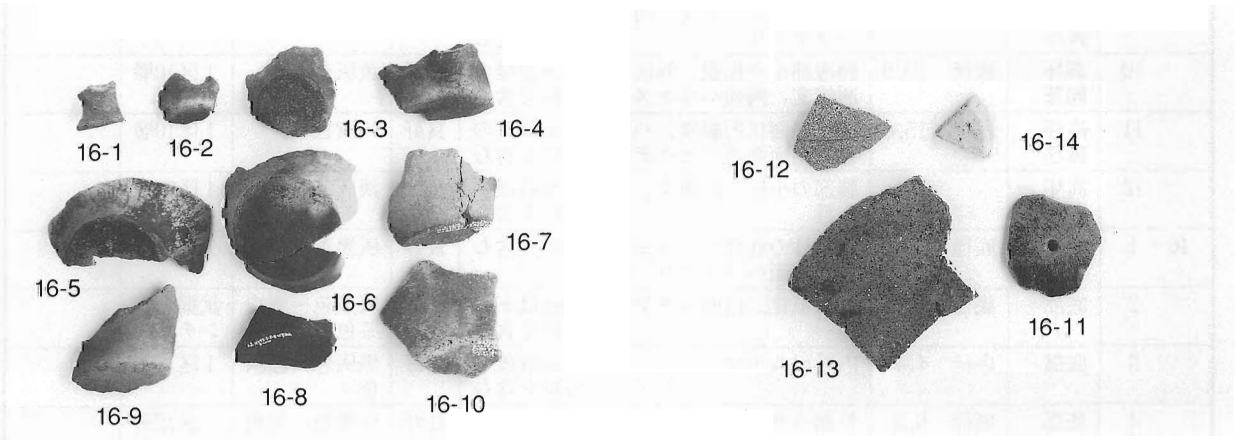
表４　弥生土器観察表（高坏、底部）

挿図番号	器　種	法量（cm）	形態・手法の特徴	胎　土	焼成	色　調	出土地点	備　考
15－１	高坏坏部		口縁部は屈折、外面に４条の凹線文、外面ハケ目	１㎜以下の砂粒やや多	良好	淡黒色		
2	高坏坏部	口径　18.8	口縁部は屈折、外面に４条の凹線文と刻み目	１㎜以下の細粒を含む	良好	淡褐色～淡灰褐色	試掘トレンチ	
3	高坏坏部	口径　18.6	口縁部は屈折、外面に４条の凹線文、内面ハケ目	１㎜以下の細粒少量	良好	褐色		外面に黒斑
4	高坏～脚部		口縁部欠損、外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ	１㎜前後の砂粒を含む	良好	淡灰褐色	試掘トレンチ	
5	高坏脚筒部		外面に９条の凹線文、内面ヘラケズリ	１㎜以下の細粒を含む	良好	淡褐色	２区12層	
6	高坏脚筒部		外面ヘラ描平行線文、内面ヘラケズリ	１㎜以下の細粒やや多	良好	淡褐色～淡灰褐色	試掘トレンチ	赤色顔料
7	高坏脚部	底径　12.0	筒部外面に凹線文、ヘラミガキ、内面ヘラケズリ	２㎜以下の砂粒を含む	良好	褐色～淡灰褐色	３区12層	
8	高坏脚部	底径　9.6	脚端部はやや肥厚、ヘラミガキ、ヘラケズリ	３㎜以下の砂粒を含む	良好	淡褐色	２区10層	
9	高坏脚部	底径　12.2	脚部外面に凹線文、内面ヘラケズリ	１㎜前後の砂粒を含む	良好	淡黒褐色	２区12層	
10	高坏脚部	底径　10.9	脚端部やや拡張、外面に凹線文、内面ヘラケズリ	１㎜前後の砂粒を含む	良好	黄灰色	１区10層	
11	高坏脚部	底径　15.0	脚部外面に凹線文、ハケ目、内面ケズリとナデ	１㎜以下の砂粒を含む	良好	灰黄色	１区10層	
12	高坏脚部		脚部の小片、凹線文、刻み目	１㎜前後の砂粒を含む	良好	淡灰茶色	１区20層	
16－１	底部	底径　6.6	台付鉢の底部か、外面ナデ、内面ヘラケズリ	細砂を含む	良好	灰黒茶色	２区12層	
2	底部	底径　5.2	外面風化、内面ヘラケズリ	１㎜以下の砂粒を含む		灰黒色～黄白茶色	試掘トレンチ	
3	底部	底径　4.4	内外面共ナデ	１㎜前後の砂粒を含む	良好	黒灰色～濃灰色	１区10層	
4	底部	底径　6.2	外面ヘラミガキ、内面ナデ	１㎜以下の砂粒を含む	良好	灰褐色～褐色	１区12層	
5	底部	底径　5.4	外面ヘラミガキとナデ、内面ハケ目とナデ	２㎜以下の砂粒やや少	良好	黒褐色～褐色		外面にス付着
6	底部	底径　6.5	外面ヘラミガキとナデ、内面ハケ目とナデ	１㎜前後の砂粒を含む	良好	淡褐色～褐色	１区12層	外面にス付着
7	底部	底径　7.4	外面ヘラミガキとナデ、内面ヘラケズリとナデ	１㎜前後の砂粒を含む	良好	灰白茶色	２区10層	
8	底部	底径　9.8	外面ナデ、内面ヘラケズリとナデ	１㎜前後の砂粒を含む	良好	黒色～黒茶色	10層	
9	底部	底径　6.9	外面ヘラミガキとナデ、内面ヘラケズリか	１㎜以下の砂粒を含む	良好	淡灰茶色	３区９層	内面に炭化物付着
10	底部	底径　10.0	外面横方向のヘラミガキ	２㎜以下の砂粒やや多	良好	淡灰褐色～淡褐色	２区12層	



第16図　弥生土器・須恵器他実測図

図版12



弥生土器（底部）　　須恵器他

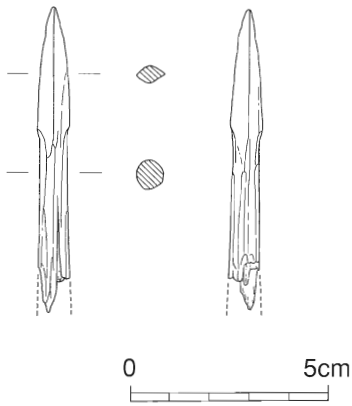
表５　須恵器他観察表

挿図番号	器　種	法量（cm）	形態・手法の特徴	胎　土	焼成	色　調	出土地点	備　考
16－11	土製品	4.8×4.5厚さ0.5	内外面共ハケ目調整した土器片に直径７㎜の円孔を穿つ、紡錘車か	１㎜以下の細粒を含む	良好	淡灰褐色	２区10層	
12	須恵器坏蓋		内外面ナデ	１～２㎜の砂粒を含む	良好	灰色		
13	須恵器壷胴部		内外面回転ナデ	１～３㎜の砂粒を含む	良好	淡灰褐色～灰色	１区６層	
14	土師質土器	底径　4.4	糸きり痕がわずかに残る	砂粒を殆ど含まない	良好	淡橙色～淡茶色	４区６層	

（２）木製品（第17～20図）

木鏃（第17図）

第17図は木鏃である。残存長7.8cm、柳葉形の鏃身は幅0.8cm、断面形はひし形である。



第17図　木製品（木鏃）実測図

田下駄（第19図－１～８、第20図－１～３）

第19図－１～８は、湿田で田植えや稲刈りなどの農作業をする時に足が沈まないようにあるいは切株などでケガをしない為に着用する稲刈り田下駄である。

19－１～３は４孔式の横長田下駄である。

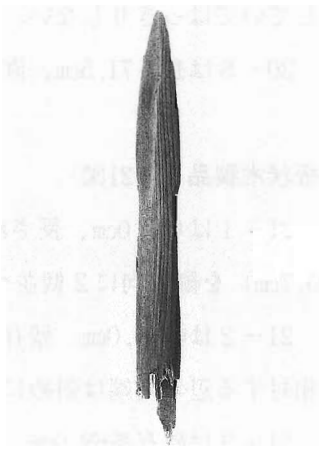
19－１は幅31.6cm、長さ28.4cm、厚み1.6cmを測る。表面は風化して加工痕ははっきりしない。角を丸く作っている。

19－２は幅28.4cm、残存長23.0cm、厚み1.6cmを測る。結緒の孔は刳った工具痕がよく残っており表面の加工痕も明瞭である。

19－３は幅35.9cm、残存長29.0cm、厚み2.3cmを測る。わずかに欠損しているがほとんど完形である。表面には加工痕がはっきり残っている。

19－４も稲刈り田下駄であるが、４孔の他に左前に１孔が残っている。幅33.2cm、残存長27.4cm、厚み2.0cmを測る。残存している角２箇所のうち１箇所のみ丸く加工されている。表面の加工痕は明瞭である。

図版13



木鏃

19－５～８は稲刈り田下駄の一部である。

19－５は幅30.0cm、残存長14.3cm、厚み1.5cmを測る。４孔共半分を欠いている。表面の加工痕は明瞭である。

19－６は幅38.3cm、残存長12.3cm、厚み1.7cmを測る。２孔残存し、表面の加工痕もわずかに残っている。

19－７は幅36.1cm、残存長9.3cm、厚み1.9cmを測る。残存した２孔の半分を欠損しているが、孔を刳った工具痕は明瞭である。

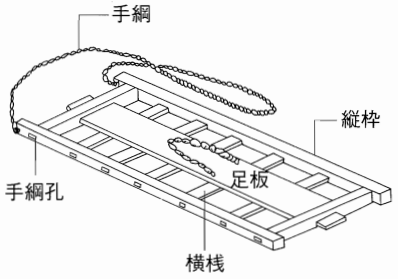
19－８は幅29.7cm、残存長6.7cm、厚み1.5cmを測る。残存した２孔は半分を欠損している。表面にはわずかに加工痕が残る。

第20図－１～３はシロフミ田下駄（田の土をならしたり、緑肥を踏み込んで土と混ぜならす代踏みに用いる下駄）の中の枠付田下駄の横桟と思われる。

20－１は幅4.1cm、残存長15.7cm、最大厚0.8cm、20－２は幅4.2cm、残存長20.0cm、最大厚1.3cm、20－３は幅4.3cm、残存長24.5cm、最大厚1.0cmを測る。いずれも片面だけに加工痕が残る。

柄状木製品（第20図―４）

20－４は鎌の柄と思われるもので、残存長22.2cm、幅2.3～3.4cm、厚み1.7cmを測る。表面はていねいに加工されている。



第18図　枠付田下駄概念図

棒状木製品（第20図－５～８）

20－５は弓のように湾曲した棒状のもので、一端は欠損し、もう一端は斜めに加工された痕跡がわずかに見られる。残存長52.0cm、直径1.4～2.2cmを測る。

20－６も湾曲した棒状の木製品で、一方の先端部分７cm位のところから斜めにカットされている。残存長78.0cm、直径1.0～2.3cmを測る。

20－７は長さ67.0cm、直径0.8～1.3cmを測る。一方の先端が加工されているように思われるが風化していてはっきりしない。

20－８は長さ71.5cm、直径2.7cmを測る。両端４～５cmの所を三角形状にカットしている。

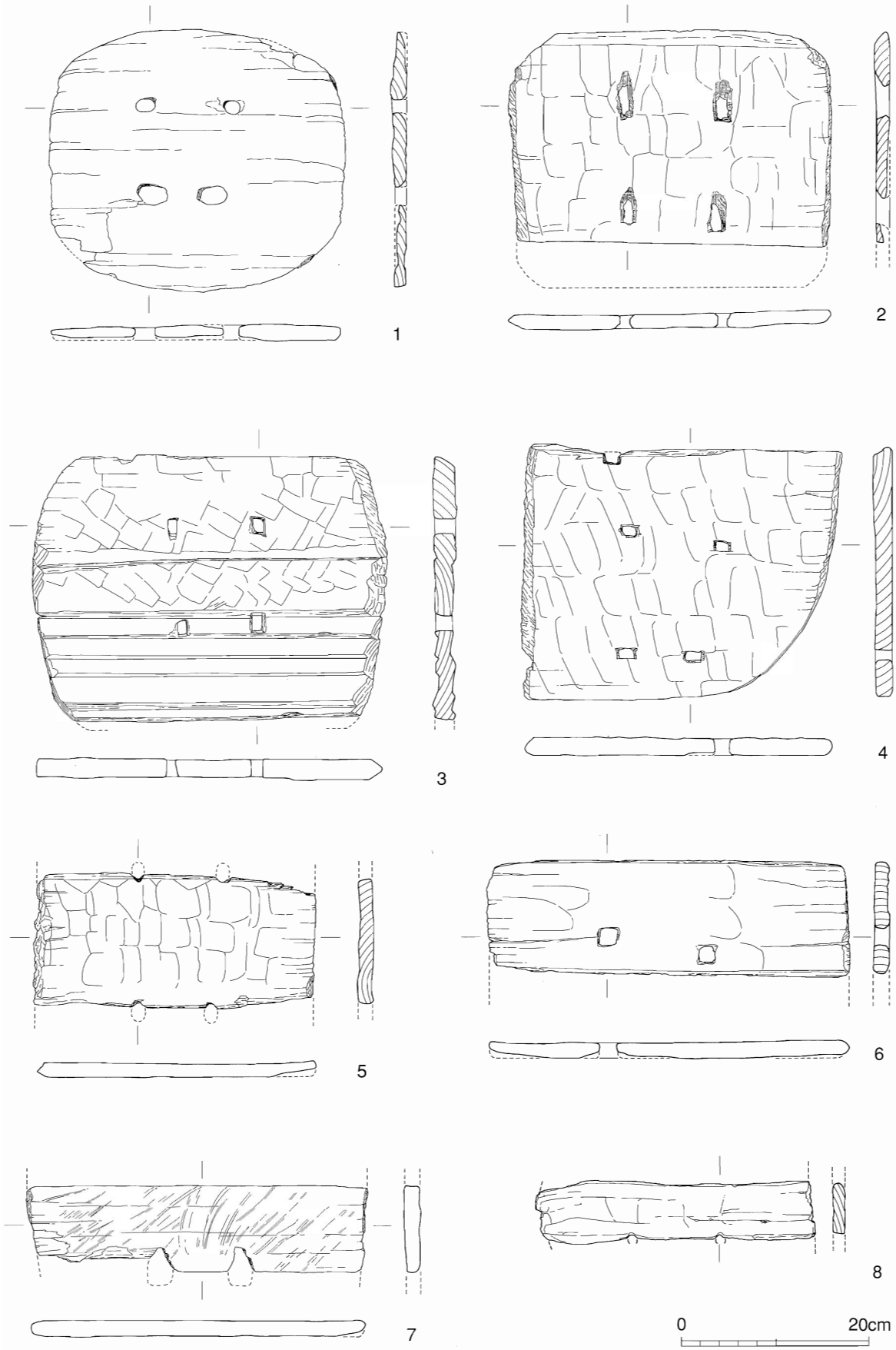
板状木製品（第21図）

21－１は幅7.0cm、長さ83.5cm、最大厚1.2cmを測る。一方の木口より長方形の貫通孔（1.7×0.7cm）を縦方向に２個並べて穿つものである。表面には加工痕がわずかに残る。

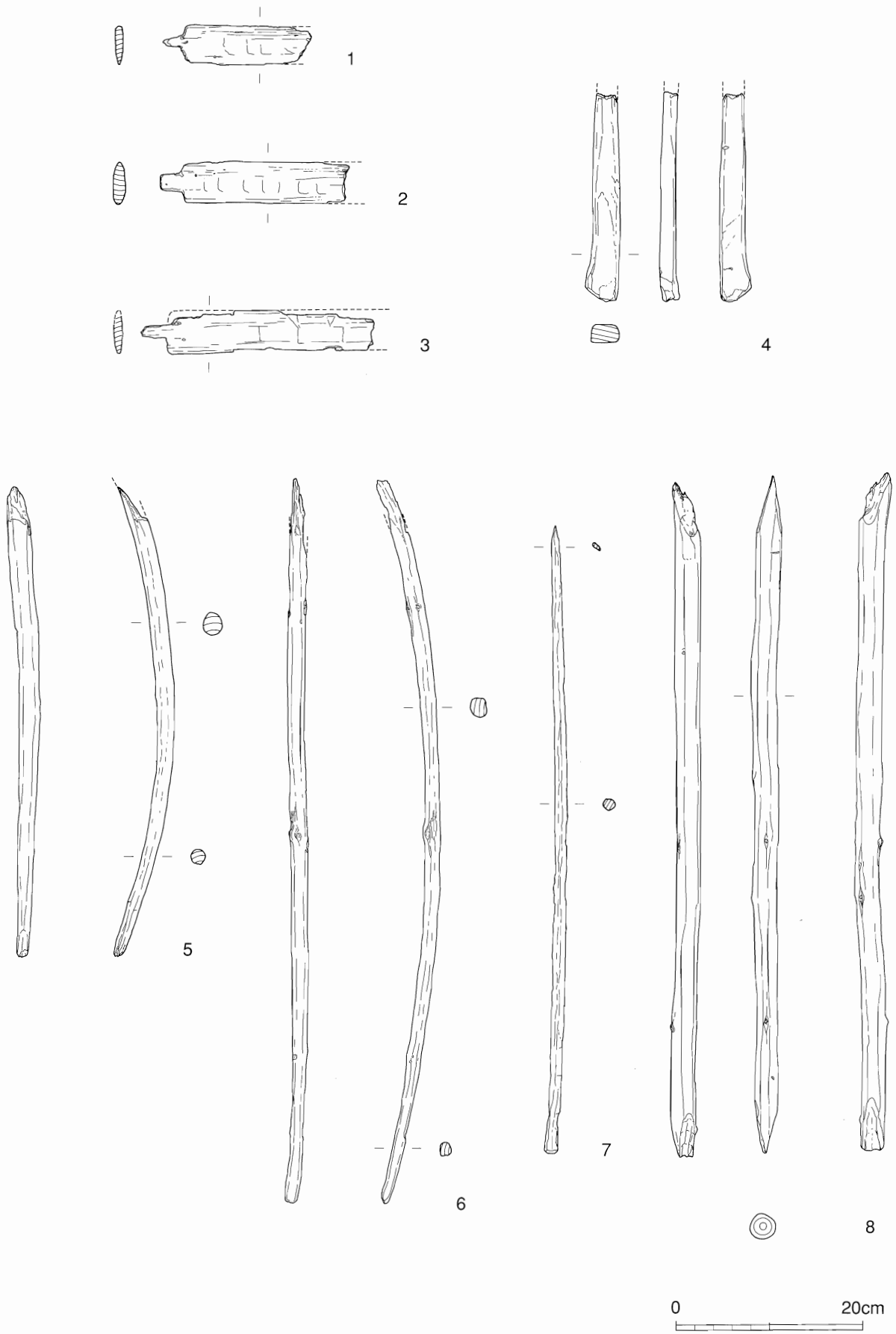
21－２は幅70.0cm、残存長12.5cm、最大厚1.5cmを測る。長辺の片側中央部を弧状に刳り、これに相対する辺の両端は斜めに加工されている。

21－３は残存長68.0cm、最大幅4.5cm、最大厚2.5cmを測る。断面は台形状で、表面に加工痕がわずかに残る。

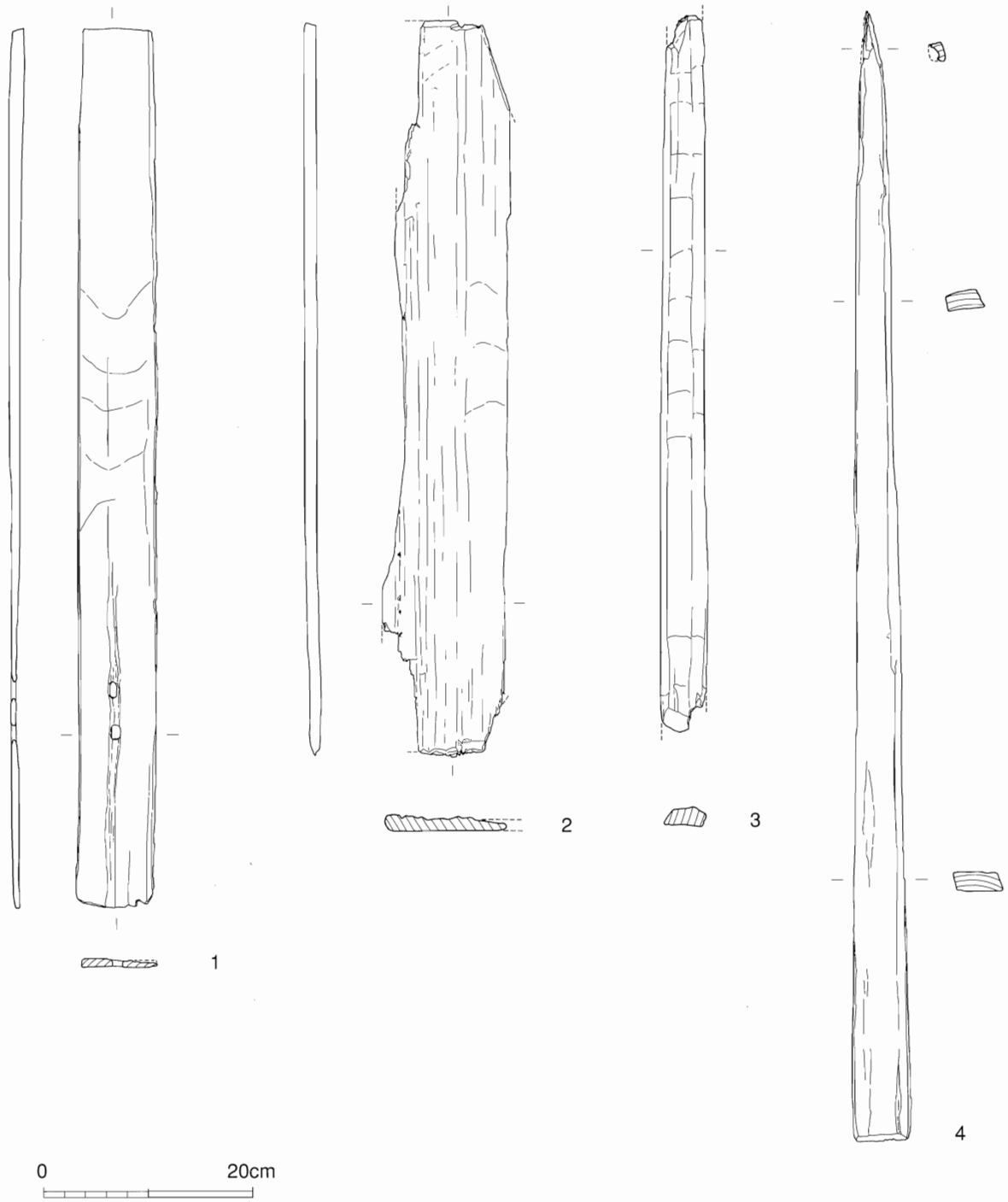
21－４は長さ1.06m、幅2.5～5.5cm、最大厚1.8cmを測り、断面は平行四辺形である。とがった先端部は風化しており、加工によるものかどうかはっきりしない。



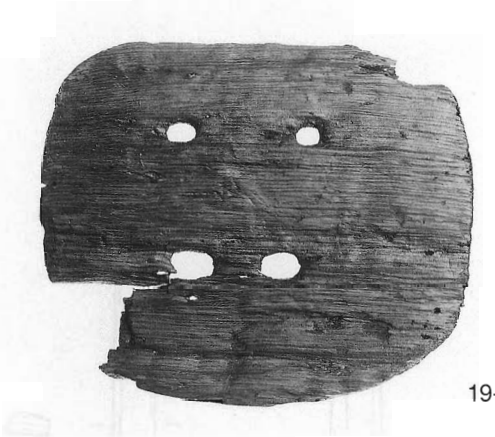
第19図　木製品（田下駄）実測図

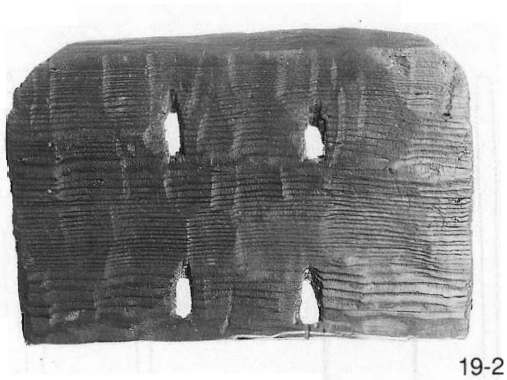


第20図　木製品実測図

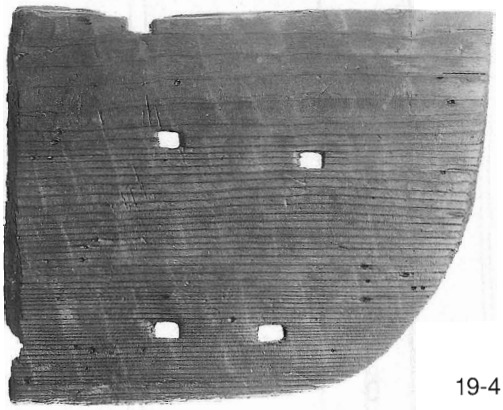


第21図　木製品実測図


19-1

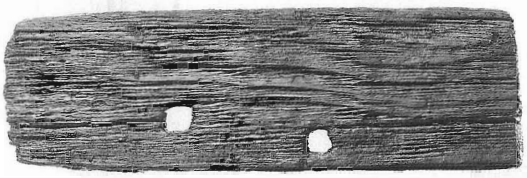

19-2

19-3

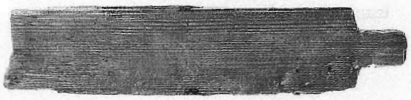

19-4

19-5

19-8


19-6

20-1

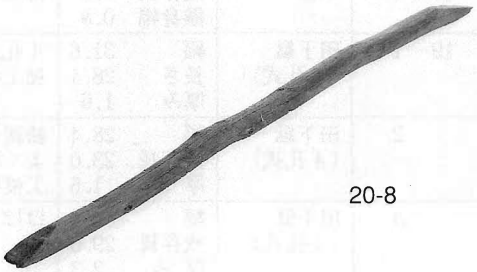

20-2

20-3

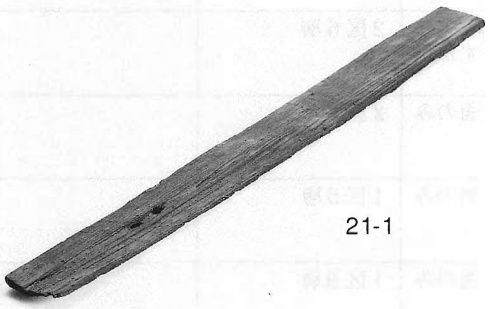
19-7

田下駄

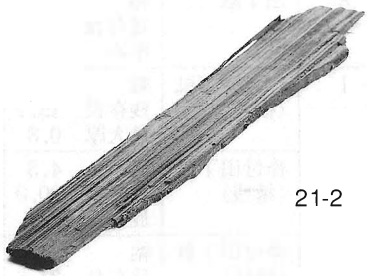
20-4



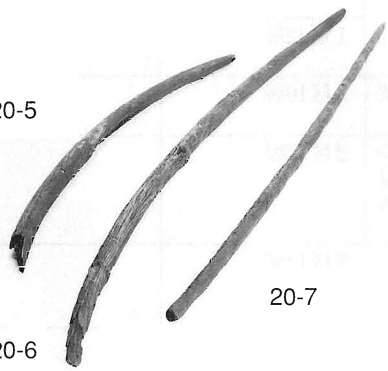
20-8



21-1



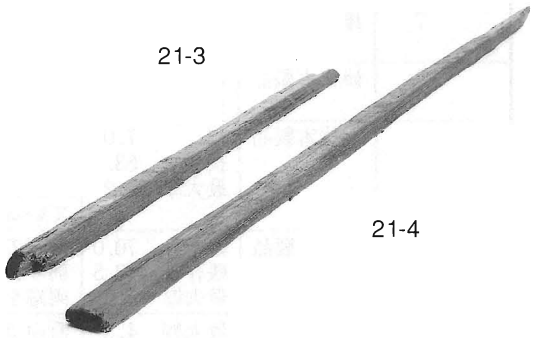
21-2



20-5

20-6

20-7



21-3

21-4

木製品

表６　木製品観察表

挿図番号	種　類	法　量　(cm)	加工の特徴・他	出土地点	備　　考
17－１	木鏃	残存長　7.8 鏃身幅　0.8	柳葉形の鏃身、断面形菱形	２区10層	
19－１	田下駄 （４孔式）	幅　31.6 長さ　28.4 厚み　1.6	４孔式横長田下駄、表面の加工痕風化、角は丸く加工	３区10層	
２	田下駄 （４孔式）	幅　28.4 残存長　23.0 厚 み　1.6	結緒の孔は刳った工具痕がよく残っている。表面の加工痕明瞭	３区22層	
３	田下駄 （４孔式）	幅　35.9 残存長　29.0 厚 み　2.3	ほぼ完形、加工痕明瞭	３区９層	
４	田下駄	幅　33.2 残存長　27.4 厚み　2.0	４孔の他に左前に１孔が残る。残存する角２箇所のうち１箇所のみ丸く作る	３区10層	
５	田下駄	幅　30.0 残存長　14.3 厚み　1.5	４孔共半分を欠く。加工痕明瞭	２区９層	
６	田下駄	幅　38.3 残存長　12.3 厚み　1.7	２孔残存、表面の加工痕わずかに残る	３区10層	
７	田下駄	幅　36.1 残存長　6.7 厚み　1.5	残存した２孔は半分を欠損、孔を刳った工具痕明瞭		
８	田下駄	幅　29.7 残存長　6.7 厚み　1.5	残存した２孔は半分を欠損、表面の加工痕わずかに残る	２区６層	
20－１	枠付田下駄 （横桟）	幅　4.1 残存長　15.7 最大厚　0.8	断面凸レンズ状、片面のみ加工痕が残る	２区７層	
２	枠付田下駄 （横桟）	幅　4.3 残存長　20.0 最大厚　1.3	断面凸レンズ状、片面のみ加工痕が残る	１区６層	
３	枠付田下駄 （横桟）	幅　4.3 残存長　24.5 最大厚　1.0	断面凸レンズ状、片面のみ加工痕が残る	１区９層	
４	柄状木製品	幅　2.3～3.4 残存長　22.2 厚み　1.7	鎌の柄か、表面ていねいに加工	３区５層	
５	棒状木製品	直径1.4～2.2 残存長　52.0	湾曲し、一端は欠損、もう一端は斜めに加工	１区12層	
６	棒状木製品	直径1.0～2.3 残存長　78.0	同上	１区12層	
７	棒状木製品	直径0.8～1.3 長さ　67.0	一方の先端を加工か、風化が進んでいる	１区12層	
８	棒状木製品	直径　2.7 長さ　71.5	両端４～５cmの所を三角状にカットしている	２区10層	
21－１	板状木製品	幅　7.0 長さ　83.5 最大厚　1.2	一方の端から約16cmの所から1.7×0.7cmの孔が２孔縦に2.5cmの間隔でうがたれている	２区12層	
２	板状木製品	幅　70.0 残存長　12.5 最大厚　1.5	長辺の片側中央部を弧状に刳り、これに相対する辺の両端を斜めに加工する	３区12層	
３	板状木製品	最大幅　4.5 残存長　68.0 最大厚　2.5	断面は台形状で、表面に加工痕がわずかに残る	２区12層	
４	板状木製品	幅　2.5～5.5 長さ　106 最大厚　1.8	断面平行四辺形、とがった先端は風化	２～３区境界10層	

（3）石製品（第22図）

削器（第22図－1）

22－1は暗黄褐色地に黒灰色の筋が入る緻密な石材（玉髄質？）の横長剥片を使用したスクレーパーである。長さ6.5cm、幅2.56cm、厚さ0.885cmを測り、刃縁部にはていねいな加工を施して、ほぼ直線状に刃部をつくりだしている。

小形石核（第22図－2）

22－2は黒曜石製の小形石核で、細石核の可能性のあるものである。長さ2.81cm、最大幅2.06cm、高さ1.45cm、重さ8.19gを測る。剥片剥離作業面は幅1.22cm、高さ1.41cmである。打面には打面調整風の剥離痕が見られ、底面には調整剥離痕、コスレ痕が見られる。作業面の状況からは、良好な細石刃はとれていないと思われる。

石錘（第22図－3）

22－3は6.8×6.7cm大、厚み1.5cm、重さ90gのもので、対称の位置に打ち欠き痕があり、石錘と考えられる。

凹石（第22図－4）

約半分が残存する。残存最大径9.1cm、最大厚5.0cm、重さ270gを測る。両面を使用し、およそ6cmの範囲が窪んでいる。

砥石（第22図－5）

幅7～10.9cm、残存長14cm、最大厚6.0cm、重さ1,280gを測る。使用面は4面あり、a面の中央部には幅3～5mm、深さ4mm程度のU字状の溝があり、他にもそれより浅い溝が何本か見られる。他の面にも多数の擦痕が認められる。何を砥いだものかは特定できない。

図版16

22-1

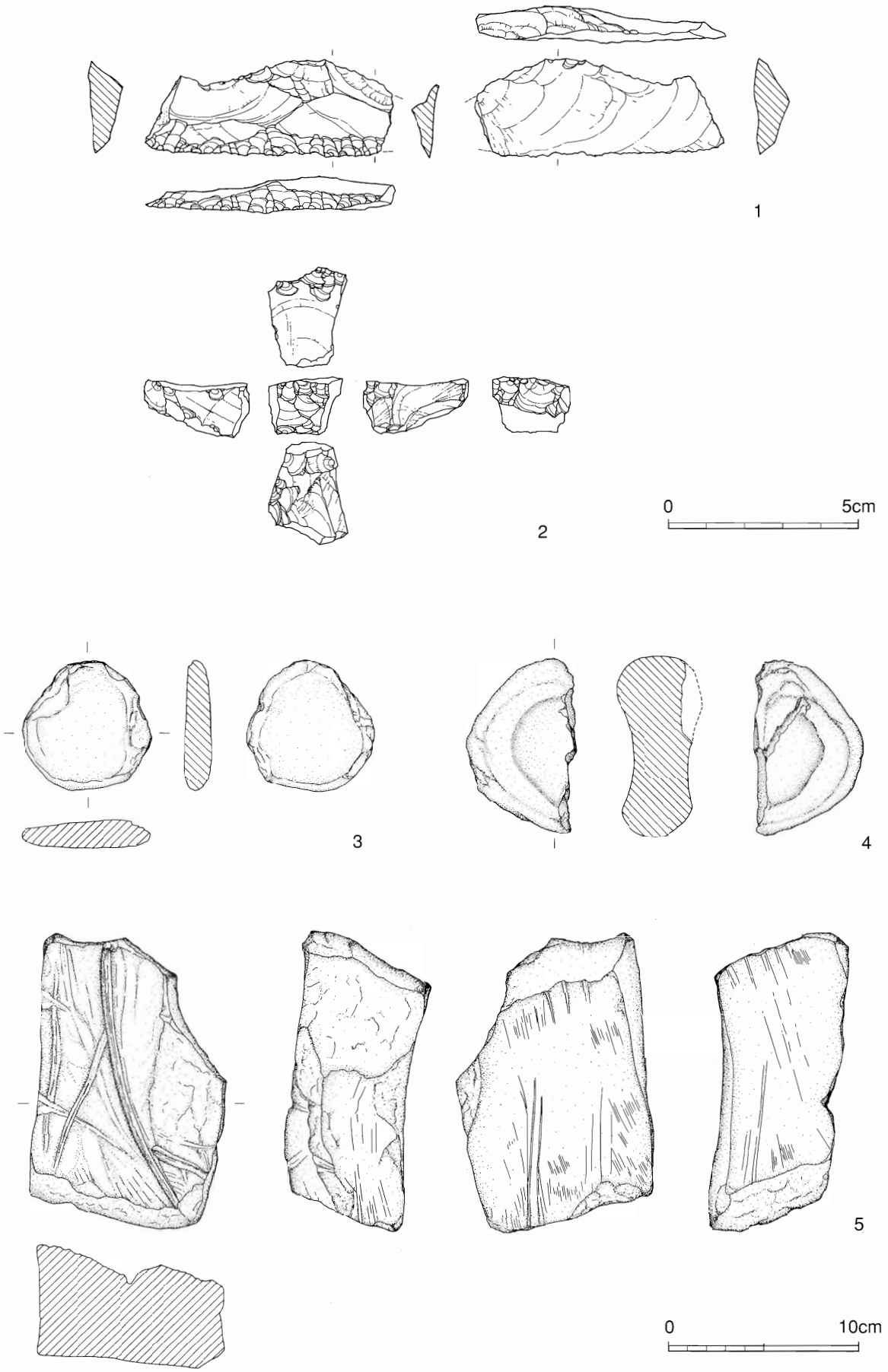
22-2

22-3

22-5

22-4

石製品



第22図　石製品実測図（１、２の実測、浄書は丹羽野裕氏による）

第４章　自然科学分析

木製品の放射性炭素年代測定

㈱地球科学研究所

放射性炭素年代測定の依頼を受けました試料について、別表の結果を得ましたのでご報告申し上げます。

報告内容の説明

^{14}C age（yBP）　：^{14}C 年代“measured radiocarbon age”
試料の^{14}C/^{12}C 比から、単純に現在（1950年 AD）から何年前（BP）かを計算した年代。
半減期はリビーの5568年を用いた。

補正^{14}C age（yBP）：補正^{14}C 年代“conventional radiocarbon age”
試料の炭素安定同位体比（^{13}C/^{12}C）を測定して試料の炭素の同位体分別を知り^{14}C/^{12}C の測定値に補正値を加えた上で、算出した年代。
試料の^{13}C 値を－25（‰）に標準化することによって得られる年代値である。
暦年代を得る際にはこの年代値をもちいる。

δ^{13}C（permil）　：試料の測定^{14}C／^{12}C 比を補正するための^{13}C/^{12}C 比。
この安定同位体は、下式のように標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表現する。

$$\delta^{13}\mathrm{C}\ (‰) = \frac{(^{13}\mathrm{C}/^{12}\mathrm{C})\ [\text{試料}] - (^{13}\mathrm{C}/^{12}\mathrm{C})\ [\text{標準}]}{(^{13}\mathrm{C}/^{12}\mathrm{C})\ [\text{標準}]} \times 1000$$

ここで、^{13}C/^{12}C［標準］＝0.0112372である。

暦　年　代　：過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}C 濃度の変動に対する補正により、暦年代を算出する。具体的には年代既知の樹木年輪の^{14}C の測定、サンゴの U-Th 年代と^{14}C 年代の比較により、補正曲線を作成し、暦年代を算出する。最新のデータベース（“INTCAL 98 Radiocarbon Age Calibration” Stuiver et al, 1998, Radiocarbon 40（3））により約19000yBPまでの換算が可能となった。

測定方法などに関するデータ

測定方法　AMS：加速器質量分析
処理・調製・その他：試料の前処理、調製などの情報
　前処理　acid-alkali-acid：酸－アルカリ－酸洗浄
分析機関　BETA ANALYTIC INC.
　　4985 SW 74 Court, Miami, Fl, U.S.A 33155

C14年代測定結果

試料データ	C14年代（yBP） （Measured C14 age）	δ13C（permil）	補正C14年代（yBP） （Conventional C14 age）
Beta- 150929 試料名（ 16707）NO. 1 測定方法、期間 AMS-Standard 試料種、前処理など wood	2150±40	−26.6 acid/alkali/acid	2120±40
Beta- 150930 試料名（ 16708）NO. 2 測定方法、期間 AMS-Standard 試料種、前処理など wood	1960±40	−24.8 acid/alkali/acid	1960±40
Beta- 150931 試料名（ 16709）NO. 3 測定方法、期間 AMS-Standard 試料種、前処理など wood	1580±40	−25.4 acid/alkali/acid	1570±40

年代値はRCYBP（1950A.D.を0年とする）で表記。モダンリファレンススタンダードは、国際的な慣例として、NBS Oxalic AcidのC14濃度の95％を使用し、半減期はリビーの5568年を使用した。エラーは1シグマ（68％確率）である。

※編者注．測定資料はNO. 1は第17図（木鏃）、NO. 2は第19図－1（四孔田下駄）NO. 3は第20図－2（枠付田下駄横桟）に対応する。

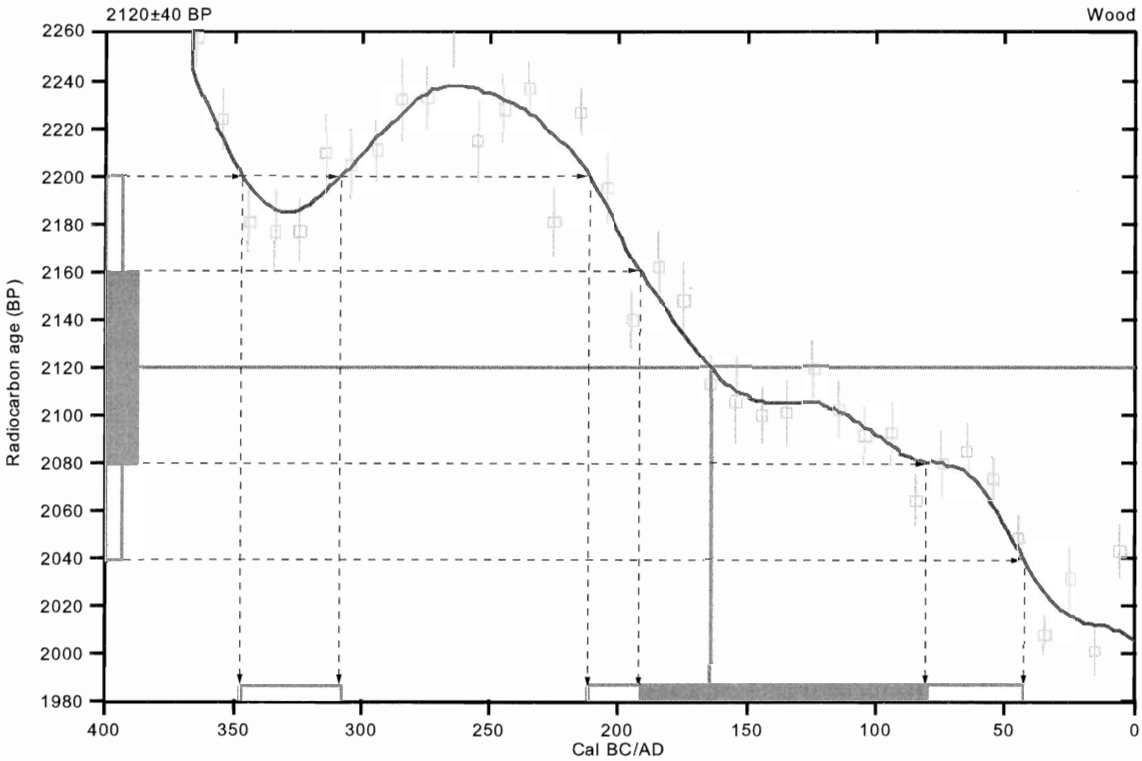
CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-26.6:lab. mult=1)

Laboratory number:	**Beta-150929**
Conventional radiocarbon age:	**2120±40 BP**
2 Sigma calibrated results: (95% probability)	**Cal BC 350 to 310 (Cal BP 2300 to 2260) and Cal BC 210 to 40 (Cal BP 2160 to 1990)**

Intercept data

Intercept of radiocarbon age with calibration curve:	Cal BC 160 (Cal BP 2120)
1 Sigma calibrated result: (68% probability)	Cal BC 190 to 80 (Cal BP 2140 to 2030)



References:

Database used

Calibration Database

Editorial Comment

Stuiver, M., van der Plicht, H., 1998, Radiocarbon 40(3), pxii-xiii

INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration

Stuiver, M., et. al., 1998, Radiocarbon 40(3), p1041-1083

Mathematics

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates

Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

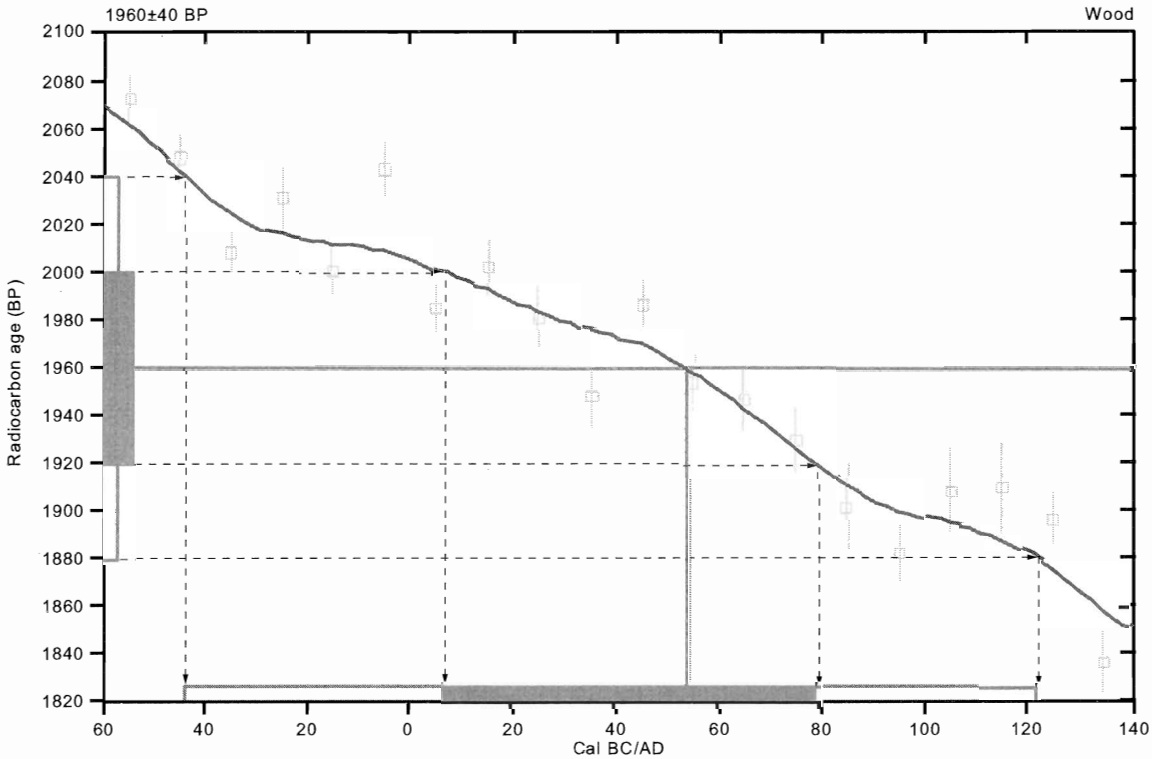
CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-24.8:lab. mult=1)

Laboratory number:	**Beta-150930**
Conventional radiocarbon age:	**1960±40 BP**
2 Sigma calibrated result: (95% probability)	**Cal BC 40 to Cal AD 120 (Cal BP 1990 to 1830)**

Intercept data

Intercept of radiocarbon age with calibration curve:	Cal AD 50 (Cal BP 1900)
1 Sigma calibrated result: (68% probability)	Cal AD 10 to 80 (Cal BP 1940 to 1870)



References:

Database used

Calibration Database

Editorial Comment

Stuiver, M., van der Plicht, H., 1998, Radiocarbon 40(3), pxii-xiii

INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration

Stuiver, M., et. al., 1998, Radiocarbon 40(3), p1041-1083

Mathematics

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates

Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

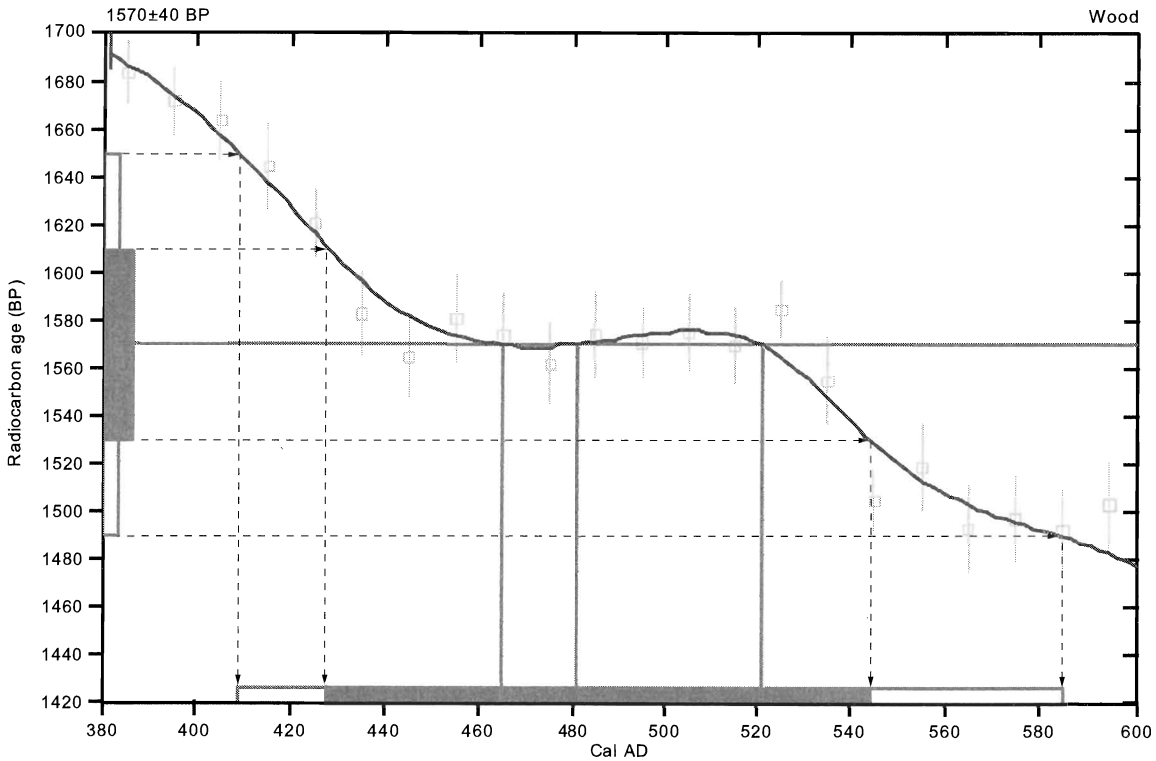
CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-25.4:lab. mult=1)

Laboratory number:	**Beta-150931**
Conventional radiocarbon age:	**1570±40 BP**
2 Sigma calibrated result: (95% probability)	**Cal AD 410 to 580 (Cal BP 1540 to 1360)**

Intercept data

Intercepts of radiocarbon age with calibration curve:	Cal AD 460 (Cal BP 1480) and Cal AD 480 (Cal BP 1470) and Cal AD 520 (Cal BP 1430)
1 Sigma calibrated result: (68% probability)	Cal AD 430 to 540 (Cal BP 1520 to 1410)



References:

Database used

Calibration Database
Editorial Comment
Stuiver, M., van der Plicht, H., 1998, Radiocarbon 40(3), pxii-xiii
INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration
Stuiver, M., et. al., 1998, Radiocarbon 40(3), p1041-1083
Mathematics
A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates
Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p317-322

第5章　ま　と　め

雲垣遺跡は、松江市南西部を流れる忌部川下流の後背湿地に形成された弥生時代中期の遺物を中心とする遺物包含地であった。東側を忌部川が流れ、西側には福富Ⅰ遺跡、屋形古墳群などの所在する丘陵が迫っている。

調査の結果、遺構は確認されなかった。土層は表土から地山面までの間には約30層の土層が堆積し、地山面は脱色された灰白色の粘土で凹凸があり、流路状の地形を示すところもあった。第５～第７層は凹凸が著しく布志名の岩盤に由来する砂岩～泥岩の小礫を多く含むこと、枠付田下駄の横桟、須恵器片、土師質土器片などが出土していることから、古墳時代以降に客土された水田であった可能性は高い。しかし、畦畔や水路などの遺構は見つかっておらず断定することはできない。第20図－２の田下駄横桟のC14年代はAD410～580（古墳時代中期～後期）であった。

自然堆積層である第８層以下には有機質の遺体（アシ？マコモ？）を多く含み、湿地状の沼のような場所だったことがわかる。特に第９～12層からは弥生時代中期後半の壷、甕、高坏等の土器類、木鏃をはじめ稲刈り田下駄ほか多くの木製品、凹石、石錘などの石製品が出土した。木鏃は模擬戦にかかわる祭祀遺物とされる武器形木製品の１種で出雲地方での出土例は少ない。出雲市の姫原西遺跡、松江市のタテチョウ遺跡（昭和62年度調査）、上小紋遺跡等で出土しているが、本遺跡出土品はタテチョウ出土品の１例に近似している。放射性炭素年代測定の結果はBC350～310（弥生前期）及びBC210～40（弥生中期）という二つの年代が出ている。稲刈り田下駄は、調査範囲が狭い割に多くの点数が出土している。その中の第19図－１のC14年代はBC40～AD120（弥生中期後半～後期前半）であった。他の個体についても同年代のものと見てよいであろう。雲垣遺跡の西側丘陵にある福富Ⅰ遺跡からも鍬、枠付田下駄の縦枠などの木製品が出土していることから、この地域で水稲耕作が行われていたと思われる。土器類は弥生時代に限定され、前期の甕以外はすべて中期後半のものである。多くは広口壷で、朝顔状に大きく開く口縁部の端部と内面に凹線文を数条施すことを特徴とする個体が大半である。

雲垣遺跡の周辺には、欠田遺跡、門田遺跡などの弥生時代の遺跡が多数存在しているが、集落の様相は田和山遺跡（雲垣遺跡と同時期の中期であるが、特殊な性格が想定される）と後期になって西側丘陵上に成立する福富Ⅰ遺跡８区以外ははっきりわかっていない。弥生前期から中期の人々の居住地は、おそらく遺跡に近い丘陵の縁辺部に存在するのではないだろうか。

雲垣遺跡から北東方向には田和山がきれいに見える。雲垣周辺の弥生人たちは朝夕山を眺めて暮らし、イネを作り、季節毎の祭りを執り行ったのであろう。また田和山造成の一翼を担ったであろうし、維持管理にも労力を使ったものと思われる。

今回の調査は、狭い範囲ながら弥生時代の田和山周辺の様相の一端を垣間見ることのできる意義深いものであった。今後、周辺地域特に丘陵縁辺部の調査が進み、乃木地区の弥生人たちの生活が明らかになっていくことを期待するものである。

参考文献　正岡睦夫・松本岩雄編『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編　木耳社　1992年
奈良国立文化財研究所『木器集成図録』近畿原始編　1993年
中村友博「武器形祭器」『弥生文化の研究』第８巻　雄山閣出版　1987年

報　告　書　抄　録

ふりがな	くもがきいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	雲垣遺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	松江市文化財調査報告書
シリーズ番号	第87集
編集者	廣濱貴子
編集機関	松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団
所在地	〒690－8540　島根県松江市末次町86番地　TEL　0852（55）5294
	〒690－0886　島根県松江市母衣町180－21　TEL　0852（28）2065
発行年月	2001年（平成13年）3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査年月	調査面積	調査原因
雲垣遺跡（くもがいいせき）	島根県（しまねけん）松江市（まつえし）乃白町（のしらちょう）	32201	D－053	35°25′57″	133°3′6″	2000.9.6～10.12	200m²	土地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
雲垣遺跡	散布地	弥生時代中期		弥生土器（壷、甕、高坏） 木製品（木鏃、田下駄） 石製品（凹石、削器）	

雲垣遺跡発掘調査報告書

2001年３月

発　行　松　江　市　教　育　委　員　会
財団法人松江市教育文化振興事業団

印　刷　㈲高　浜　印　刷
松江市東長江町902－57